

## モラトリウム研究者の思い出 —日野舜也さん座談② タンザニア—

鵜飼 正樹 \*

1996年4月から2004年3月まで、京都文教大学人間学部文化人類学科教授として、教育・研究にご尽力いただいた日野舜也さんに、ご自身の学問と人生を語っていただく座談の第2幕である。この第2幕では、『人間学研究 4』に収録した北海道時代続く、タンザニアでの調査・研究について語っていただいた。

日野さんは、1964年に日本を出発し、66年に帰国するまで、タンガニーカ湖畔のまち、ウジジに暮らし、当時まだほとんど研究者のいなかったアフリカの都市研究に取り組まれた。「アフリカに都市などあるのか？」といわれた時代である。

今回は、この2年間のフィールドワークの様子とともに、都市人類学者・日野さんのユニークな発想の一端を垣間見ることができる座談となっている。とりわけ、ウジジの住宅の裏庭での発見から、都市の人間関係を解明する理論構築の手がかりをえるあたりは、都市人類学者・日野舜也の面目躍如たるものがあるといえるだろう。また、第1幕「北海道時代」と合わせて読んでいただければ、日野さんのアフリカ都市研究が、北海道大学時代の恩師である鈴木榮太郎の都市社会学の方法を自家薬籠中のものとした成果でもあることを、わかっていただけるだろう。

なお、「モラトリウム研究者の思い出」というタイトルは、日野さんの最終講義（2004年1月23日）にさいし、ご自身でつけられたものをそのままいただいたものである。

座談は、2004年2月から3月にかけてインタビューしたうち、タンザニアでのフィールドワークとその前後の話を鵜飼が編集し、日野さんにチェックしていただいたものであり、本文についての責任は、すべて鵜飼にある。

京都文教大学大学院文化人類学研究科（当時、現・名古屋大学大学院）の片岡千代子さんには、前回に引き続き、インタビューに同席し、テープを起こすという煩雑な作業を買って出ていただいた。長時間のインタビューに応じていただいた日野さんともども、記して感謝します。



今西錦司先生に呼び出されて京都へ

北海道にいて、突然、あのころですから電話でしたか、電報でしたか、ともかく、今西錦司先生から、会いたいのですぐに京都に出てこいという知らせがはいりました。それが、1964年の6月か、7月でした。だけど、すぐに旅費を払ってはくれないので、親に借金して会いにいったんです。そうしたら、「おまえをアフリカの都市調査に連れていくことに決めた」というわけです。

今西さんは、わたしをアフリカに連れていくのにはだいぶ反対だったらしいです。わたしが青々と弱々しく見えて、「こんなのアフリカに連れていったら、死んじゃうんじゃないか」とおもったらしいのだけれど、富川盛道さんが、「あれはけっこう気がつよいし、ちょっと結核の病歴があるけれど、だから自分の身体はちゃんと管理できる人間だから大丈夫」といつてくれたらしいです。

それで、1ヶ月半くらい京都にいてアフリカについて勉強しろというので、そのころいちばんアフリカ関連の文献があった天理大学の図書館へいきました。天理教本部の宿泊施設に泊めてもらって、10日くらい、図書館にかよいました。毎日図書館にこもって、夕方には、何冊かの本をかりて、暑い暑い部屋の蚊帳のなかでメモするわけです。ここで、初めて、スタンレーの『リビングストーン博士発見記 (How I found Dr. Livingstone) 』などを原書でよみました。

京都では、最初、百万遍のお寺に泊まるようにと宿が用意されていたのですが、わたしが「お寺なんか泊まるのはいやだ」とわがままをいったら、それなら、わしの家に来いということになって、北白川の梅棹忠夫さんのおたくに2週間居候しました。梅棹さんの隣の家が、転勤かなにかで空き家で、梅棹さんの家の庭づたいにそこを拝借して、ほとんど毎晩、梅棄さんと飲んで、いろいろしゃべって、ずいぶんいろんなことをまなびました。なんといっても、北海道しか知らない田舎ものだったのですから。

そうしたらそこで、熱をだしてしまったんで

す。ちょうど、日本脳炎が流行していて、もし日本脳炎だったらご迷惑をかけるなど心配したのですが、幸いすぐに熱が下がって安心しました。でも、だれにもいえず、本当に心配しました。

それで、「おまえは9月にアフリカに連れていく」ということになりました。そこで、いっぺんは北海道にかえって、支度してこいということになって、手渡されたのが、リングフォンのスワヒリ語のテキストとテープです。でも、出発まで1ヶ月足らず、準備に忙しくて、勉強する暇などまったくなくて、結局スワヒリ語はほとんど覚えずにいくことになりました。故郷での送別会のことは前回述べました。

#### 京都大学アフリカ調査隊

今西さんは、よく知られているように、独特の進化論者で、サルと人類史を結びつけて考えようという、スケールの大きなことを考えられていました。ですから、京都大学アフリカ調査隊（「アフリカ類人猿学術調査」）は、類人猿班と人類班で組織されました。そして、人類班は、人類進化史の各段階、つまり、採集狩猟、牧畜、半農半牧、農耕のそれぞれにあたる人びとの社会をやろうということになったのです。そこで、東アフリカにいったところ、タンザニアの北部に、格好のフィールドが見つかったわけです。エヤシ湖という琵琶湖くらいの大きさの湖の南東部に、マンゴーラという地域があり、そこは、ハツァという採集狩猟民、ダトーガというウシ牧畜民、イラクという半農半牧民、異なる部族から集まって来て、「われわれスワヒリ民」という超部族的な意識を持ったスワヒリ農耕民が、隣接して暮らしているという非常によい場所で、そこで1960年からのフィールドワークは展開していました。

今西さんのえらいところは、そこまでいくのなら、人類進化の最終の都市をやるのが1人くらいいいのではないかと考えられたところでした。富川さんの、わたしを加えさせたいという進言もあったろうとおもいます。それで、富川さんは、はじめはマンゴーラに近い都市的

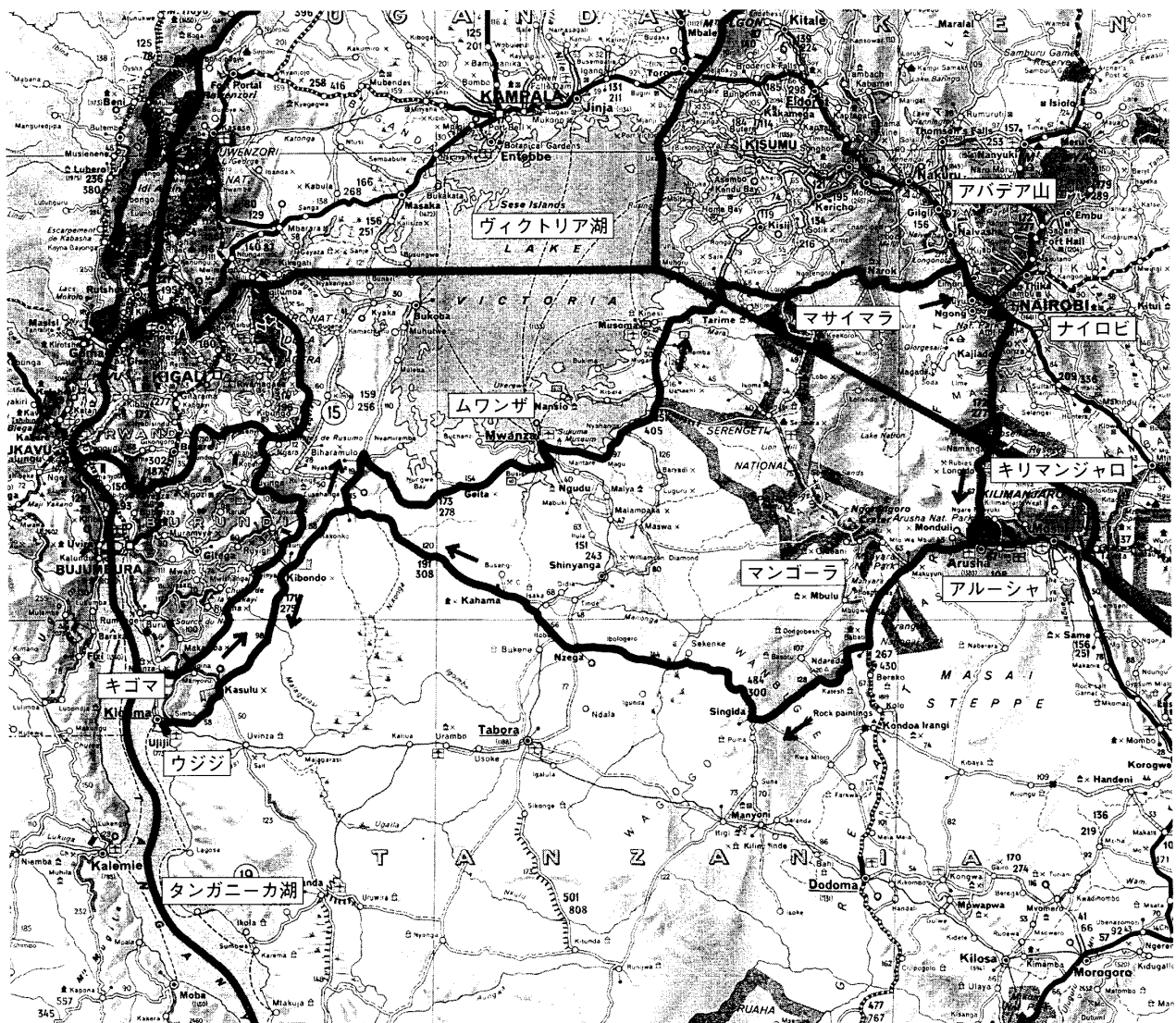
集落である、ドンゴベシとか、カラツとかを考えたらしいのですが、どうも適当なところがない。確かにまちといえばまちなんですが、北海道の農村市街地みたいなもので、どうも小さくて都市とはいえない。一方で、チンパンジー班のフィールドであるタンガニーカ湖畔には、ウジジという人口1万人以上のふるいまちがある。ちょうど、チンパンジー班のフィールドの入口あたりになる。ここに、1人、フィールドと日本とを結ぶ連絡係をする人を置いてもいいのではないかという結論になって、そこまではわたしの知らないところで話が進んでいたんですが、わたしの派遣がきまったころは、もう、日野はウジジときまっていたわけです。京大隊にわたしがなぜ選ばれたのかというのは、

こういうことです。

日本を出発したのが、1964年9月21日。ちょうど東京オリンピックが開かれる3週間ほどまえです。今西さんと、わたしと、おなじ北大から、マンゴーラ近くのハナン地域に入ることになった和田正平の3人で旅立ちました（以下、資料1参照）。

ナイロビは都市だ

そのころは、まだ直行便などないので、途中で機中泊を入れて2泊したのかな？ 1泊はインドのボンベイ（現ムンバイ）でした。リッツホテルという一流ホテルにとまりました。夜、散歩に出たら、そこいらの路上にいっぱい人がゴロゴロ寝ているので、すごいところだなとお



資料1 今西先生との旅

ナイロビ→アルーシャ→キゴマ→ウジジ→ムワンザ→マサイマラ→ナイロビ

もありました。なんといっても、はじめて外国の空気を吸ったのですから、その印象は強烈でした。

ナイロビについたら、藤岡喜愛さんが迎えに来られていて、次の日は、近くのアバデア山にサファリに行くということになりました。わたしと和田正平は、ナイロビについて、いわゆるサファリルックの衣装を買いそろえ、半ズボンのサファリパンツ、半袖のサファリシャツ、サファリシューズといういでたちで、朝の5時、はりきって車のにりこみました。藤岡さんが心配されて、今西さんに「日野くんたち、あれで寒くないのかな」といったところ、今西さんは「そんなこと自分の経験で学ぶのだからほっとけ」といわれたらしいです。つゆ知らぬわれわれは、はしゃぎ、興奮して車に乗ったのですが、アバデア山は、3800メートル、富士山くらいの標高です。いくうちに、みぞれが降ってきました。寒風吹きすさびはおおげさですが、ともかく震え上がりました。それで、その夜書いた親元への初手紙は、「アフリカはたいへんに寒いところだ」でした。これが、アフリカ生活最初のエピソードです。

ナイロビでは2泊しました。初めてアフリカのビールを飲んで、初めてホテルのボーイさんにかしずかれて、夢のようでした。アフリカにいくときに、多くの人から、「アフリカに都市なんてあるの」と聞かれてきたことはもう述べましたが、それに反論してきたわたしも、初めてナイロビを見て、びっくりしました。すごい都市ではないかと。空港から車でまちに向かうと、道の両側にはいろいろな花がいっぱい植えられて、たくさんの人びとが箒で道路を清掃していて、きれいで、まちにはいると4～5階の立派な建物が並んでいて、すごいなあとおもいました。満員のバスがいっぱい走っているのにも驚きました。何のことはない。わたしのイメージも、日本の友人たちとどっこいどっこいだったのですね。いまおもいだすと、おかしくなります。

## 一路ウジジへ

さて、次の日から、過酷なサファリがはじまりました。ナイロビから、国境を越えて、タンザニアのアルーシャに入り、ここで、3泊しました。アルーシャというまちは、ナイロビと同様、1500メートル以上の涼しいところにヨーロッパ人植民者が作ったまちで、ナイロビにくらべると小さなまちですが、とてもにぎやかでした。

アルーシャ滞在中に、藤岡さんについて、80キロ離れたチャガ族の主邑モシを訪ねました。ここも落ちついて、よいたたずまいでした。キリマンジャロがかすんで見えました。いまはありえませんが、そのころは、主要道路をゾウやキリンがゆうゆうと横切るのに出会いました。アルーシャでランドローバーを買い、ジョセフというチャガ族のドライバーをやとって、ウジジへの出発準備をしました。

そして、アルーシャをでて、一路ウジジへ、1500キロ近い旅でした。アルーシャをでてしばらくは、よい道でしたが、あとは、舗装どころか、穴だらけのラフロードでした。ぜんぶ道ばたにテントを張ってのキャンプで、何回かジョセフと一緒に車のパンク直しもしました。夜は、テントを張り、夕食を作り、深夜まで今西さんの酒の相手をやり、後かたづけをして、ねて、朝5時に朝食の支度。その後かたづけをして、出発します。そこで、つい、居眠りをする、今西さんにしられました。「せっかくアフリカの大地を走っているのに、居眠りするのはもったいない」といわれるのです。「そんな無茶な」とおもいましたが、いま、若い学生さんとアフリカを車で旅をすると、たいがいが、他愛なく眠ってしまうのですね。ああ、もったいないとおもいますよ、いまは。

夜に日を継いで、こういうキャンプを2夜、3日目の深夜、キゴマにつきました。ウジジまで8キロの、地域の中心地（県都）です。翌日、和田正平とわたしは、ウジジにうつりました。4～5階の建物が立ち並ぶナイロビやアルーシャを見たわたしには、2階建ての家が1軒もない、草屋根、土壁の家々が並ぶウジジ

は、これが都市かとおもいました。

われわれは、いわゆるアフリカン・ホテリに宿を取りました。レストランの裏手にいくつかのベッドルームがあって、宿泊できる場所です。そこに滞在すると、あさから晩まで、大人も子どもも、好奇のまなざしの人びとが集まってきて、「ああ、水を飲んでる」、「カメラをいじってる」と、われわれの一举一動を観察します。たいへんでした。

今西さんは、ここから2週間、チンパンジーのフィールドであるブッシュに入り、われわれはその間、ウジジにいました。わたしの重要な仕事は、これから2年間、ウジジで暮らすところをさがすことでした。

チンパンジー班の第1期の隊員である東滋さんが親しくつきあっていて、ハミシ・ムゴイという人がいました。ビンティ・ムリショというかわいいおかみさんと6人の子どもがいました。そのころは、ウジジ中心部の商店街からすこし奥まったカワワ通りという広い通りにすんで、国立病院の運転手をしていました。ホテリにいるあいだも何回か食事に招待され、お互いに気に入りました。このムゴイとは、ウジジ定着後、2年にわたり、肝胆相照らす仲になりました。

#### 今西さん最後のアフリカの旅

今西さんがフィールドから帰られ、わたしも、ムゴイと再会を約して、再び、車の人となりました。ここからは、わたし、和田正平、ジョセフのランドローバーに、今西さん、チンパンジー班のお抱え運転手、ブガンダ族出身のブケニアのトヨタの大型トラック「大和号」が加わりました。ルートは、キゴマからヴィクトリア湖畔のムワンザを通して、ケニア国境を越え、いまのマサイマラ国立公園を横切って、ナイロビまで、これも2000キロ近い旅でした。

予定なら、夕方にナイロビに着くはずが、マサイマラの真ん中でランドローバーのステアリングが落ち、走行不可能になり、ブッシュに捨てて、あとでナイロビから回収にくることにしました。いまはにぎやかな国立公園ですが、そ



今西先生との旅

のころは何にもないブッシュです。近くにいたマサイの牧夫にお金を払って見張りを頼み、マサイの1人を道案内に、さあ出発。ところが、今度はトヨタトラックです。ローからセコンドにギアを入れると、カタカタカタカタとエンストしてしまいます。結局、ローのまま、エンジンが烧けないように、ゆっくりゆっくり、時速10キロくらいのスピードで走りました。夕刻つくはずが、夜が明けて、翌朝8時にナイロビにたどり着きました。驚いたのはマサイの道案内人です。真夜中の真っ暗ななかを、「その岩のところを右にいけ、その木のところを左にいけ」と、あらゆる木々や岩が、みんなかれの知識のなかに組み込まれているのでした。

ほとんど30時間不眠不休の旅をして、ナイロビのホテルで一眠りして、ビールを飲みにあらわれた今西さんは、「今日の日記には、生涯最悪のサファリと書くぞ」とうれしそうにおっしゃっていました。ナイロビで後発の福井勝義くんを迎え、数日後、今西さんは帰国されましたが、これが、今西さん最後のアフリカの旅でした。

#### ダレサラームで調査許可をもらう

それで、和田正平、福井勝義、そしてわたしで、ナイロビを発って、アルーシャを経て、マンガラにいきました。藤岡喜愛さんがおられ、また、ちかくで、羽仁進さんが、渥美清さん主演の映画『ブワナトシの歌』を撮っていました。寅さん以前の渥美さんでした。そのあと、和田正平と福井はフィールドのハナンに向

かい、わたしはタンザニアの首都のダレサラームにでて、調査許可を取ることにになりました。

タンザニアは、まだ独立後数年で、日本の大使館もなく、関西系の小さな繊維会社、西沢商会とか、八木商会とかの駐在員のかたがたが、向こうの政府要人との個人的つきあいで、商売をされていました。その1人、八木商会の山本晋さんというかたが、助けてくださいました。「あっそう、調査許可が要る？ ちょっと待って」、「日野さん、明日、文部大臣とアポが取れたから、10時にいっしょにいきましょう」。すごい話です。そして、文部大臣に会って話したら、「いいでしょう、すぐ書類を作らせましょう」。こうして、わたしは調査許可をもらったのです。

これには後日談があります。ウジジに落ち着いて4ヶ月ほどたったころ、日本から電報が入り、「おまえだけではなく、和田、福井も含めた全体の調査許可を取れ。ついては、おまえが代表として、首都ダレサラームへいけ。申請書はすでに、ナイロビ（ケニア）の日本大使館を通して送ってある」ということでした。いくらカスワヒリ語はできるようになっていましたが、大役でした。あとで聞くと、和田、福井たちが、アルーシャで、警官となにかトラブルを起こし、調査許可をもっていないのなら、すぐにダレサラームへ行ってとってこいということだったそうです。

それで、汽車でダレサラームへって返し、役所に日参ということになりました。しかし、わたし1人のときは、すんなりいったのですが、今度は、京大からの正式の許可願というものが引っかかりました。

おりしも、4月です。イースターのキリスト教行事がいっぱいで、それに、巡礼月のイスラーム行事も重なり、宗教の平等を国是とするタンザニアは、国の祝祭日続き。役所にいって、なにか手続きをすると、明日は何とか、あさっては何とかの祝日、その次の日は日曜日、だから、3日後に来い。いくと、今日は連休で、担当者が故郷に帰ってきていない、帰るまで待て。こんな調子で、埒があきません。毎

日、当局に日参しても、京大からの申請書など届いていないとけんもほろろ。

仕方ありませんので、ダレサラームからバスに乗って、2000キロ離れた日本大使館のあるケニアの首都ナイロビへとでかけました。満月にぼっかり浮かび上がったキリマンジャロを見たのは、生涯のラッキーでしたが、とにかく、ナイロビでは、その申請書はとくにタンザニア政府に送ってあるといいます。で、そのコピーをもらって、ダレサラームへ戻りました。コピーを持っていくと、「待て待て」と調べてくれて、「あった、あった」と。なんと、申請書の表紙をつけたタイピストが、「KYOTO」を、「TOYOTO」とうちまちがえたため、トヨタ自動車のファイルに入っていました。

1ヶ月半ほど、これで費やしました。もちろん、貧乏ですから、ホテルには泊まれない。1ベッド2ドルという、雑居ホテルで過ごしました。荷物はほとんど、八木商会の山本さんに預け、食事もよくごちそうになりました。でも、この滞在のおかげで、ダレサラームというアフリカ都市を、底辺からじっくり見られたのが収穫でした。

こういうおもいがけないことがいっぱいおこって、わたしのアフリカ都市研究に厚みを加えたのは確かです。とにかく、無事、全員の調査許可がとれ、わたしはふたたびウジジに戻りました。これは、後日談です。

## ウジジ調査が始まる

話はさかのぼって、1964年11月、わたしはダレサラームを発って、2泊3日、48時間ほどの汽車の旅をして、キゴマ、そしてウジジにもどりました。9月に日本を出て、10月に今西さんを送り、マンゴーラ、ダレサラームを経て、ウジジに帰ったのは12月1日でした、そして、ムゴイの家の一室に落ち着いたのでした。ムゴイの家での最初の晩、夜中に目が覚めると、蚊帳に何匹かのホタルがとまって光っていたのが印象的でした。

次の日からしばらくは、あいさつ回りです。警察や軍隊、TANU（そのころのタンザニア

の一派独裁の政党)のオフィス、カワワ通りの地区長と、ムゴイについて歩きました。3日目だったか、市場を歩いていたわたしは、いきなり、1人の老人に腕をつかまれ、「おまえはスパイだ。一緒に警察へいこう」と引っ張られました。問題はなかったのですが、じつは、そのあと半年くらい、秘密警察がわたしの行跡をさぐっていたようです。あとで、この老人とも、秘密警察とも仲良くなり、その警官とはいっしょにビールをおごり合う仲になりました。だけど、見たこともない外国人が、突然、えらそうにまちを徘徊していたら、だれだってびっくりするでしょう。

そのときわたしは30歳を越えていましたから、ウジジでは、いちおう、ウジジのそのくらいの年かさの人に見合った生活をしようとかんがえました。ただ、ちがうのは、かれらは結婚していて何人かの子持ち、わたしは独り身ということでした。アフリカで人を雇うときには、結婚しているかどうか大きな条件になります。結婚していればもう一人前、信頼できる一人前のおとこ、ある程度の年になっていて独身ならば、なにか欠陥があるにちがいないとなります。わたしの場合は、多くの人、わたしがとうぜん結婚していて、日本に家族を置いて単身赴任しているにちがいないとおもっていたはずでした。

わたしは、ムゴイの毎日の行動についていくことにしました。かれが買い物にいくときは、一緒に買い物かごを下げてついていく。ちなみに、ウジジでは、日々の買い物は、おとこたち、まずはやしきのご主人たち、あるいは、ワハの家僕のしごとです。女性、とくに老人や未婚の少女たち以外の女性、とりわけ若い人妻が1人で市場や路上を歩き回することは、明らかに、非難の対象でした。あからさまに面と向かっていうことはありませんが、確実に「はしたない」と、口さがない人びとの話題にはなりました。

わたしは、顔を合わせる近所の人とは、ムゴイ家の一員としてあいさつし、つきあう。老人には、ムゴイがやるとおなじような敬意をあら

わす。ムゴイの子どもには、ムゴイと同じように、しかるときはしかる。ムゴイには、月20シリング(そのころは1シリング約60円でした。これは、当然、地元の相場よりは高い。2倍くらいか?)、食費は払わず、時に応じてさかなや肉を買って来て提供するという形で、トラブルは一切なかったとおもいます。日本からの送金がいろいろの理由で遅れ、2ヶ月ほどは、居候させてもらったこともありました。

わたしは、おもに、ムゴイを通じてスワヒリ語を習得したのですが、けっこうきびしい先生でした。わたしがごまかすと、きつく、「ヒノ、もう一回いってみなさい」と、なかなか許してくれません。でも、わたしが、自分でだいたのスワヒリ語がわかるようになったとおもいこんでいたある日、スワヒリ同士がけんかをしている場面に出くわし、早口でやり合うその言葉が全然聞きとれないことがありました。かれらのおおくは、わたしと話すときは、手加減をしてくれてくれていることがわかりました。もっとも、1年たったころは、わたしも、いっばしに口げんかくらいできるようになっていましたけれど。

ウジジというまちは、1万2000人くらいの人口だったのですが、わたしの滞在中は、コンゴの動乱期で、逃げてきた人びとも多くて、1万8000人くらいになっていました。といっても、のちのいわゆる難民とはすこしちがってましたね。ウジジには、何代か前にコンゴから移住してきた人が多くて、その何代か以前の縁者を頼ってやってきたということで、死んだおじいさんから聞いていた知らない一族の人びとに初めてあったというようなことでした。

### ウジジのスワヒリのルーツ

ウジジのスワヒリ住民の多くのルーツは、三つあります。

ひとつは、もともとタンガニーカ湖東岸のウジジ周辺にいた先住民の「ワジジ」(ワは人の複数を表す接頭辞、ジジは部族名)の人びとです。かれらは、ウジジの東北にひろがる広い地域に住む、牧畜を伴った農耕民であるハ族のサ

ブトライブで、ムワミといわれる伝統的な首長を持つグループです。

それから、何代か前に、コンゴの西部、タンガニーカ湖西岸やマニエマ地方の森林部から、タンガニーカ湖をわたってやってきた人びと。この潮流には、二つのルートがあります。

一つは、タンガニーカ湖の西岸にいた半農半漁民です。ブワリ、ゴマ、ニャカランバ、あとから加わったベンベなどで、「ワブユ」と総称されています。もっとも早い人びとは、たぶん、いまから300年くらい前にきたのでしょう。伝承では、カゴイというウジジの人が、タンガニーカ湖西岸部にわたり、彼らに移住をすすめたのだといわれています。

もう一つのグループは、「ワマニエマ」と呼ばれ、19世紀のドレイ交易で、コンゴの森林部のマニエマ地方からつれられてきた多くの異なる部族出身のドレイの子孫だといわれている人びとです。かれらの仲間、ウジジからインド洋岸のダレサラームまで、かつてのドレイ交易ルートにそった都市に点々と分布しています。これらの人びとは、首都ダレサラームをはじめ、交易ルートに点在する多くの都市で、その市民の草分けのグループの一つとされています。多くがかつてのドレイの子孫とされているのですが、どうも、ウジジでは事情がちがうようです。ドレイ出自の人もちろんでいるのだけれど、同時に、マニエマ地方でアラブやスワヒリの商人と結託して、ドレイ狩りや、売買の下請けというか、エージェントを請け負った人びとの子孫もけっこういるようです。つまり、アラブ・スワヒリ商人から鉄砲を与えられて、それでドレイ狩りをやっていた人びともいるようです。だから、かれらは、ウジジ郊外のカシンボ地区にけっこう大きな耕地を持ち、祖先のお墓もそこにあります。

#### 部族集団間の冗談関係・忌避関係

さて、おおくのアフリカの社会には、その親族組織に、冗談関係と忌避関係というおもしろい習慣があります。たとえば、ある部族では、親子が忌避関係、祖父母と孫たちが冗談関係に

なります。忌避関係は避けあう関係ですから、お互いに不必要な接触は避ける。距離を置いて、礼儀正しくということになります。ある部族では、割礼を終えた男子とその母親は接触を避ける。それに対して、冗談関係は、卑猥な冗談も含めて、お互いにかかったりする。また、いろいろな人生の相談は、親ではなく、ある社会では祖父母と、ある社会では母方のおじとする。

こういう、忌避と冗談の関係は、部族のなかでバランスのとれた社会関係をつくるのですが、都市では、この関係が、都市を構成する部族集団間で展開します。ウジジでは、コンゴ系農漁民(ワブユ)と、コンゴのマニエマ人(ワマニエマ)のあいだで発現します。前者が「湖の人」、後者が「山の人」です。マニエマが、「おまえら、湖の人は、何代もサカナを食べているのでサカナくさくてかなわん」といえば、相手は「おまえらマニエマは、じいさんの代まで、人を食べて生きてきたんだろう」とやり返します。ムゴイの話によれば、かれが子どものころには、両方が徒党を組んで、まちなかでけんかしたといいます。スワヒリで一体化した人びとにも、じつは、それぞれの出自意識は消えてなくて、お互い自分の母語は忘れて、両方ともスワヒリ語しか話さないくせに、都市でのこういう関係で、うまく、部族関係をとりもっているのです。

それぞれの部族についての、偏見も含めた決めつけもけっこうあって、「バンゴバンゴ(マニエマの主要部族)は、頑固で理屈っぽい」とか「ベンバ(ブユの一部族)は、まだ、ウジジのことがよくわかっていない田舎ものだ」とか、いろいろ言い合いますし、子どもがなにかしでかすと、「この野蛮人、おまえはベンベか」なんていうことを平気で口にします。スワヒリのなかにも、こういうちがいの意識はありますし、むしろ、それをつきあいの前提として、容認しあっているようなところがあります。



### 東アフリカ沿岸部におけるスワヒリ文化の形成

そうすると、ウジジの歴史を考えるためには、どうしても、東アフリカ全体の歴史、あるいは、世界の歴史まで考えなくてはなりません。そのへんについてはのちにふれますが、ここではざっと、ウジジと関連することについて述べておきます。

まず、東は中国、インドネシアから、ビルマ、インド、ペルシャ、アラブ、東アフリカを結ぶ、広大なインド洋を舞台にした大交易の存在です。このごろは「海のシルクロード」とも呼ばれています。2000年以上の歴史を持つ、この交易路の西端に発達し、交易の一翼を担ったのが、東アフリカ沿岸部でした。金や銅、香料やマングローブなどの建材、象牙や犀角、ドレイ等が、アフリカからの主要な商品でした。この地方は、アラブ世界から、沿岸を意味する「サワーヒル（つまりスワヒリ）の地」と呼ばれていました。

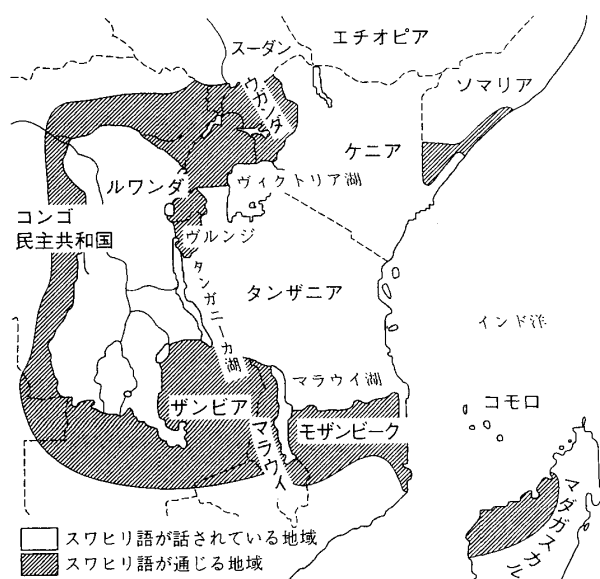
アラブ商人は、このスワヒリ地方へ季節風に乗ってやってきます。そして、季節風が変わって北へ向かうまでの数ヶ月間、アラブ商人は交易をするために滞在するのですが、その間に現地妻をめとり、子供もできます。

このアラブ人を父とし、アフリカ人を母とし、そしてその母の親族のもとに生まれた混血児たちが、スワヒリの港町での文化形成の中心

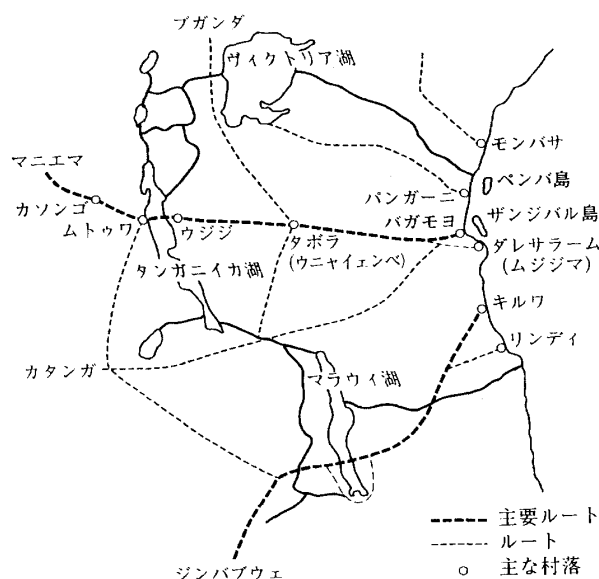
的な担い手となります。こうして、スワヒリの土地を舞台に、アフリカとアラブの混血文化である港町の都市文化、スワヒリ文化が発達しました。つまり、父なるアラブ文化と、母なるアフリカのバントゥ文化のあいだにできたのがスワヒリ文化です。15～17世紀のポルトガルのインド洋支配によって、アラブ世界との密接な文化接触が制限され、アフリカ社会との絆がつまり、このスワヒリ文化というアフリカの都市文化が形成されました。

いま、東アフリカでひろく流通しているスワヒリ語は、そこで交易語、地域共通語として形成されました。スワヒリ語の、身体名称や自然現象などの基礎語彙、そして文法構造は母なるバントゥ語そのもので、文明語（本とか鉛筆とか）、抽象語、宗教用語、あいさつ語などが、父のアラブ人が持ってきた、アジア起源です（資料2）。

東アフリカの沿岸部でみればわかるのですが、混血といっても、もうアラブの特徴はほとんどなくて、髪は縮れ、色は黒く、いわゆるアフリカの人とほとんど区別はつきません。ただ、その意識は、われわれの祖先はアラブだ、シラージ（イランの南西部）だということになっています。



資料2 東アフリカにおけるスワヒリ語流通地域



資料3 東アフリカの内陸交易ルート

## 内陸交易の拠点・ウジジ

19世紀になると、アラビア半島の東南のマスカットオマーンのスルタン、サイッド・サイドが軍勢を率いて東アフリカに到達し、ポルトガル勢力を南へ駆逐して、大陸から60キロ離れたザンジバル島を首都に、細長い海岸線を支配するスルタン国をつくります。そこに、イギリスやアメリカや、いろいろの欧米の国々がささりこんで、交易が開かれます。そして、それまでは海岸で、ニヤムウェジやヤオなどの内陸部の部族民が運んでくる商品を扱っていたアラブ・スワヒリ商人が、交易の拡大にしたがって、内陸部族民が開発した交易ルートに沿って、自らも内陸部に入っていく、交易をおこなうようになります。そのルートの、タンガニーカ湖畔の拠点がウジジでした（資料3）。

ザンジバルでは、19世紀初めから、クローブ（丁字）の栽培がはじまりました。クローブは、インドネシアのモルッカ諸島が原産ですが、それがザンジバルに導入され、最盛期には、世界の80%の生産を記録します。このクローブは、花の萼を干したものです。ですから、花の咲いているときに採集しなければ商品になりません。そのため、採集期には、集中的な労働力を必要とします。その労働力として、ドレイが必要とされました。

このころのもうひとつの主要な商品が象牙です。ヨーロッパで象牙の需要が高まり、内陸交易路の末端であるタンガニーカ湖西部のコンゴのマニエマの森がその舞台となります。この地域のゾウは、マルミミゾウといわれる小型のゾウですが、その象牙は堅く、良質でした。そのマニエマの森では、銃を使って、ドレイを集め、象牙を集め、ドレイたちに象牙を担がせ、ザンジバルまではこばせる。ウジジはそのキャラバンのタンガニーカ湖畔の出発点でもありました。

ドレイたちに象牙を担がせ、5～6月ころにウジジを出る。3ヶ月かかって、沿岸部に到着する。そして、10～11月のクローブの開花期に集中的労働をさせ、そのあと、用がおわったドレイたちをアラブやインド世界に売る。象牙は

ヨーロッパに売る。けっこうあこぎな商売だったとおもいます。

では、なぜ、ウジジがその出発点にえられたのか。ここには、別の歴史的経緯がありました。

ウジジの東、120キロほどのところに、ウヴィンザというところがあります。ここには塩泉、つまり、岩塩がわき水に溶けて湧出する場所があります。シオはアフリカ内陸においては分布が偏在し、どこでも、主要な交易品になります。ここでも例外ではなく、ウヴィンザを中心にシオ交易のルートが開けていました。ウジジの先住民ワジジの人たちが、19世紀、農閑期にウヴィンザまで、シオの交易に出かけていたなどという記録もあります。また、タンガニーカ湖は世界で2番目に深い湖で、湖岸は断崖絶壁というところが多いのですが、ウジジ周辺は、ルイチェ川の流出点に近いので、流出した土砂が累積した砂浜で、丸木舟の発着に都合がよかったのです。

このような経緯もあって、ウジジ周辺が、交易路の拠点として選ばれたのでしょう。アラブ・スワヒリ商人の到着以前、すでに、ウジジには市場があったそうです。だから、アラブ・スワヒリ商人もウジジを拠点に選んだのでしょう。

1872年、当時アフリカ内陸で行方不明になっていた著名な探検家リビングストーン博士を、アメリカの新聞記者スタンレーがこのウジジで発見したということで、ウジジはアフリカ探検史の有名な場所になります。いまでも、ウジジにはその博物館があります。1880年代にそのスタンレーが、再度、ウジジを訪れ、ウジジの市場の情景を記録しています。そこでは、どの部族の人が、どんな商品をウジジの市場に持ってきているのか、克明に描いています。じつは、そのおなじ情景は、いま、ウジジの市場にいつでもうかがえます。コンゴ漁業民はサカナを、ワジジの人たちはニワトリや農産物を、マニエマの人はサトウキビやマニオクをというふうに。さすがにいまはドレイは売られていませんが。

### スワヒリ社会のなかのウジジ

こうして、ウジジにアラブ・スワヒリ商人がやってきて、ステーションを置きます。その市場に、まわりの人びとが、農産品、サカナや肉、薪や建材、いろいろなものを持って集まってくる。また、部族のいえ作りやへい作りに長けた人びともやってきます。また、郊外に耕地を持つマニエマ人や、ドレイの人びともいます。

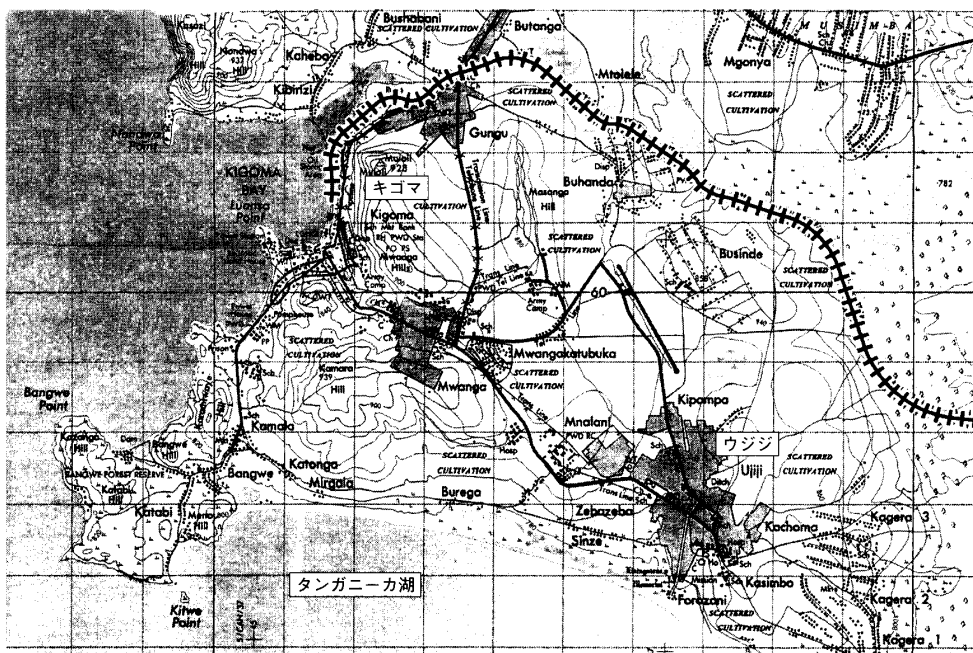
そういういろいろな人びとが、次第に、イスラームに改宗しはじめます。スワヒリ語で文明を意味する言葉を「ウスタラブ」といいますが、これは「ウスタ・アラブ」、まさにアラブ風という意味です。市場ができ、そこに集まってきた人びとが、イスラームに改宗し、部族社会から離れてウジジの住民になったという自覚をもったとき、かれらは、自らが文明化した、つまりウスタラブした人びと（ワスタラブ）ということになります。そして、沿岸部からアラブと一緒にやってきた混血の、つまり、色の黒いスワヒリ商人と同一視して、「われわれはスワヒリになったのだ」という意識を持つようになります。これが、部族意識を超えたウジジの市民意識、統一意識の基礎になります。

### 植民地体制下のウジジ

19世紀末になると、ヨーロッパ人が沿岸部から植民地化を推し進めました。アラブ・スワヒリ商人のドレイ交易は禁止され、その余波がウジジにも押し寄せてきました。タンガニーカ（現タンザニアの大陸部）は、ドイツの植民地になり、ウジジもその中に入りました。そして、かつての内陸交易ルートに沿って、首都のダレサラームから、鉄道が建設され、1914年に開通します。ところが、鉄道は、ウジジにはいる10キロ手前で突然北上し、とおくウジジをまいて、行政の中心になったキゴマにつながります。これには、植民地行政府が、得体の知れないイスラームのまちウジジを嫌ったことと、キゴマがウジジとちがって砂浜ではなく、大型蒸気船の発着に向いていたこともあります（資料4）。

いずれにしても、おかげで、ウジジは、19世紀のたたずまいを色濃くのこした伝統都市として残りました。わたしにとってはラッキーというべきでした。かつてのウジジに入る交易ルートは、いまは、すばらしいってというか、荒れ果てたマンゴー並木として残っています。

植民地化は、ウジジにも大きな変化をあたえました。鉄道がキゴマまで開通し、1912年に導入されたリエンバ号（いまでも現役で就航中）と



資料4 ウジジ周辺図（ウジジを避けた鉄道の迂回に注意）

いう大きなドイツの蒸気船がタンガニーカ湖に就航し、おかげで、ウジジで大量にとれるダガーという小ザカナが大きな商品価値を持ちはじめます。ダガーは、一見、カタクチイワシに似た数センチの小ザカナですが、半日砂浜で干すと、もうくさりません。南京袋に詰めて、植民地各地の鉱山やプランテーションに積み

出され、安価なタンパク源として重宝されました。首都ダレサラームのサカナ市場では、いまでも、ウジジ産のダガーには、沿岸部でとれた小ザカナの何倍かの高値がつけられます。また、マニオク、コメ、サトウキビなどの農産物も商品になりました。ちなみに、ウジジは、西のコンゴからの熱帯降雨林性の作物も、東のサバンナ性の作物もとれる、豊かな農産地でもあります。

### ウジジのスワヒリ民

イスラームに改宗して、スワヒリ市民意識を持つようになったウジジ住民は、このような経済的余剰から、自分たちがブワナ（旦那衆）であるという誇りを身につけるようになりました。自分たちは、部族民ではなく、都市に住む旦那衆なのだという意識です。そして、ムスリムの常として、次第に、肉体労働を嫌悪し、軽蔑するようになってきます。

そのころには、植民地化が進み始め、貨幣経済が浸透してきます。伝統的農耕経済のなかにあった部族社会の人びとが、税金の金納強制によって現金が必要になり、わかものが都市へ現金を求めて、出稼ぎにくるということが起こりました。

ウジジにあらわれたのは、東北部に広がるハ族の人びとでした。ハ族は、その北部で強大な王国を作ったブガンダ、ブルンジ等の流れをくむ人びとで、それほどつよくない首長制度を持ち、きちんとした社会組織を維持し、ウシなどの家畜を持ち、けっこう豊かな農業生産力を持っていた人びとですが、近くに市場もなく、産品を現金化する手段をもっていなかった。そこで、現金収入を求めて、やむなく最寄りのウジジのまちにでてきたわけです。そのうちに、かれらには、青年期に、あるいは、なにかで現金が必要になったときに、一定期間ウジジにでてきて、肉体労働に従事するという習慣が身につきます。かれらの参加によって、ウジジは、中核のスワヒリ人の旦那衆、肉体労働のハ族の人びとという重層社会になってきます。

いっぽう、かつてウジジを支配し、ドレイ交

易をすすめてきたアラブ商人は力を失い、代わりに、ドイツ（第1次大戦後はイギリス）の植民地政府が権力を握りました。そして、植民地体制下で経済力を持ったインド人や、植民地政府の下について行政の実務を受け持つアフリカ人の人びともウジジにやってきます。かれらの多くは、早くから西欧化したキリスト教徒のチャガ族の人びとです。沿岸から比較的近く、スワヒリ化の影響も少なく、植民地化初期にキリスト教に改宗し、植民地教育を受けて、下級公務員になった人びとです。わたしもずいぶんつきあいましたが、多くがスワヒリ語よりは英語の方がよくできました。そして、タンザニア、タンザニア、国民社会建設といいながら、生活スタイルとしては、親が故郷で選んでくれたチャガの娘以外と結婚しない。いわば、建前はタンザニア国民でも、本音はチャガ意識という人びとでした。もっとも、この建前の国民意識、本音の部族意識というのは、じつは、チャガのみでなく、タンザニア中の多くの人びとに共通して見られる心性でしたが……。

植民地時代が終わって、タンザニア国民社会ができて、このチャガのような人びとが、エリートとして、中央政府の中心になることには、かわりありません。そういう中央から派遣され、赴任してきたエリートたちを、ウジジのスワヒリは「ワゲニ（お客さん）」とよびます。それに対して、自分たちは「ワナンチ」といいます。「ワナ」は子ども、「ンチ」は土地です。つまり、土地っ子ということになります。あいつらは、いばり、権力を持っているけれど、いずれどこかへ帰る、お客さんだということです。

ハ族や周囲の部族社会の人びとは「ワシェンジ（未開人、野蛮人）」で、われわれはすすんだ「ワスタラブ（文明人）」である。いっぽう、エリートは「ワゲニ」で、われわれは「ワナンチ」である。このようにして、ウジジの市民の中核として、ジジ、ブユ、マニエマなどの出自を超えた超部族集団、都市民集団が形成されたのです。これが、ウジジのスワヒリ民です。

## ムゴイ一家と暮らす

ウジジでは、わたしは、先に紹介したハミシ・ムゴイさんという、スワヒリの家族と一緒に暮らすことになりました。かれの家に2年間、下宿をして、フィールドワークをしたのです。

ムゴイは、わたしより2～3歳年長だともっています。いまはちがいますが、そのころのアフリカでは、子どもや若者をのぞいて生年月日をきちんと記録されている人はいませんでしたから、あくまでも推定です。わたしは31歳でウジジにいましたので、かれは、そのころ33～4歳だったろうとおもいます。その年ごろは、ウジジのスワヒリでは、かみさんがときには数人、そして数人の子どもがいるのがとうぜんの、立派なブワナでした。ムゴイにも、わたしが滞在しているあいだに生まれた子も含めると、2男4女。あとになってもっと増えました。

ムゴイの生業ですが、それが、すごいです。かれは、当時、国立病院の運転手でした。いわば、国家公務員。だから、よく救急車に乗って、まちなかをサイレンをならして走っていました。そして、郊外にかなり広い畑を持っています。わたしも何回か訪れましたが、ココナツやし、マニオック、ピーナツやさつまいも、いろいろ植えていました。それに、かれは、もともと、ニャカランバ族というブユ系の農漁民出身ですから、丸木舟をもって、月のない夜はダガー漁に出かけます。それから、自動車の修理ができます。ラジオも修理できます。そういう注文がけっこう来ます。そして、コーランが読めて、泥棒をつかまえないなどというときには、コーランを読んで、犯人に呪詛をかけたり、魔よけができますので、そういう依頼もあります。それから、わたしに部屋を貸して、まあ、法外とはいいいませんが、このまちの相場よりは高い部屋代を取っています。その他にも、ときどき、深夜に奥さんのビンティ・ムリショと揚げドーナツを作って、近所のレストランで委託販売している。

ムゴイはかなり特殊だけれど、スワヒリの人

の多くは、左官、屋根修理、家具作り、へい作り、時計直し、みんな、特技をつかった仕事をいくつか、くるくる使い分けて、生計を立てていました。アフリカの都市民の家計は、給料だけでは絶対足りないのだけれど、みんな、そういうふうにくるくる知恵を働かせて、ちゃんと生きているのです。

ムゴイにしても、医師や患者を数百キロも運んだりしたら、その帰りには、ブッシュの道ばたで売っている薪や木炭、イモやバナナを買って、車の上に積み込んで帰って来ます。休みが取れば、とりためたダガーなどを持って、汽車や汽船に乗って、どこかへ売りにいきます。その帰りには、いろいろの商品を仕入れて帰ってくる。ブルンジへいったらおいしいフランスパンや流行の衣類を、コンゴへいったらガラス製品やヤシ油を、ザンビアにいったらサトウをと、それぞれの国で安く買える商品を仕入れてくる。そういう意味では、貨幣経済や生産物の地域格差や国際格差などにものすごくうまく適応して暮らしているのです。こういう経済事情についての情報は、あとでふれる、おしゃべりの輪のなかで、いろいろ交換されていました。

病院のしごとは夜勤がおおく、ムゴイは、けっこう昼間はいえにいて、買い物に出かけることがありました。そういうとき、わたしは、一緒に出かけるわけです。毎日、そうやって市場へいきます。その途上で、あとから触れるように、ウジジのおしゃべり集団のなかに巻き込まれていくのです。市場にいけば、わたしは、じっと目をこらして、朝から人びとの動きを見えています。どういう人が、何時ごろ、何を持ってくるのか。トラックで来る人、自分で自動車、リヤカー、あるいは自分の頭にのっけて荷物を持ってくる人、ハ族の労働者に荷物をはこばせてくる人。どういう人が、何を、どうやって市場に持ってくるのか。だれが、都市生活のなかで、どういう役割を担っているのか、そういうことが市場で人をながめていると見えてきます。こういう反復性が都市の生活のリズムなのです。

## ウジジの階層化とスワヒリの生業

ウジジで最初に調べたのは、生業です。いったい、どういう生業があるのか。それを一生懸命記録していると、見えてくるのが、生業と密接に結びついている階層で、そしてその歴史的变化をたどると階層化になります。

まず、見えてきたのが、ウジジ社会を構成する、6つの集団です。第一に、ウジジの中核層をしめるスワヒリの人びと。ウジジの95%の人びとです。そして、スワヒリの下でハウスポイやポーターなどの肉体労働に従事するハ族の人びと。官庁や警察にいるワゲニ（お客さん）。さらに、まちの中心の通りで商店やガレージ、運送業をいとなむアラブ人やインド人。そして、郊外のキリスト教会やミッションの病院などで働くヨーロッパ人。

そして、スワヒリと呼ばれ、自分たちも「われわれスワヒリ」というつよい集団意識を持った人びとが、まちの生活に欠かせない主要な生業を担当していることが、明らかに見えてくる。かれらがウジジの中核層で、その他の人びとは周辺層ではないかということが見えてきます。

この中核層の民族誌、生活誌をきちんと探り、周辺層との社会関係を押さえれば、ウジジの全体像が見えてくるという見通しが立つことになります。そのへんの見通しが、ウジジ研究の最初の調査報告になるはずで、あとは、民族誌として、ウジジに見られるあらゆる生業を、6つの構成集団ごとに見てみる、それから、ムゴイのような、一筋縄ではいかない複雑な生業生活をしている、スワヒリの人びとの生活像を描いてみる、これが、最初の基礎的作業でした。

このウジジのようなたたずまいは、欧米の研究者からは、「そんなものが都市か」といわれることになる。最初にアフリカの都市のフィールドワークをやった、アメリカの人類学者、ホレース・マイナーにいわせれば、これは、かれの著書の表題“The primitive city of Timbukutu”、「未開都市」ということになる。その後も、多くのアフリカ都市研究者の研究のタイトルに

は、“Oshogbo, An Urban Society?”というように、クエッションマークなどがつくわけです。まあ、いうなれば、こういうものが都市だという西欧のイメージがあって、あとは、疑問符や限定をつけて、条件付きの都市だということです。これも、ある種のオリエンタリズムかなとおもいます。ウジジの場合も、こういういかたをすれば、「これは都市なのだろうか？」と。でも、わたしは、これはぜったい「都市なのだ」といいきったわけ。「何だかんだいって、これは都市だ、文句あるか」と。

ただ、ウジジは、東京やニューヨークのような近代都市ではなく、京都やパリと共通する伝統都市なんです。つまり、ウジジの中核層であるスワヒリの人びとは、自分たちが、まわりの部族社会の人びと、つまり、未開人・野蛮人ではなく、進んだ、文明化した都市民なのだという、自分たちの都市意識を維持している。いっぽうで、江戸っ子意識、京都の町衆意識と同様に、「われわれ土地っ子（ワナンチ）」という意識で固まっている。そこで、スワヒリ都市、ウジジの都市性が規定されることになりました。

こうして、生業や階層を手がかりに、ウジジの都市的社会構造には何とか近づくことができました。けれども、それだけでは、ウジジのまちを理解したことにはならない。1年くらいたったところで、富川さんが、一度ウジジにわたしの仕事ぶりを見にやってくるということになりました。スワヒリ語も一応できるようになりましたが、でも、まだ、わたしはウジジのまちのことをよくわかっていない。こうして、夢を見るわけです。何にもまだわかっていないのに、夢のなかでは、もう日本に帰っている。そして、報告をしなければならない。「まだ何にもデータがない、どうしよう……」、というところで、冷や汗いっぱい目覚めるんです。あとで富川さんにもいわれ、のちには、わたしもしたり顔にいつている、「フィールドワークは、わからないということに耐えなければいけない」という境地には、まだまだ達していませんでした。

### うらにわでの発見

そんなことをやっているうちに、偶然あることに気づきました。

ある日、わたしは、ムゴイのやしきのうらにわで、手紙を読んでいたのかどうか忘れましたが、家具大工のサイディさんに作ってもらった安楽いすにひっくりかえっていました。ウジジのスワヒリのいえは、表通りに面してバラザといわれる入口があり、そこからいえの真ん中を通して、うらにわに出られるようになっている。うらにわは草べいでかこまれていて、そこはおんなの場所、家族のプライベートな場所になっていて、オレンジやマンゴー、ココナツやシヤアブラヤシが植えられています。そのオレンジの木陰でわたしは安楽いすを出していたのです。それは、男女隔離、男女分業の、基本的にムスリムの世界です。バラザは、公的な場所を意味します。おとこたちのパブリックな世界です。役所のまえにわや、法廷もバラザです。それに対して、うらにわのへいで囲まれた場所は、知らない人や、そんなに親しくない人は入ってこない、家族のプライベートな場所です。

わたしは、もう、ムゴイ一家のメンバーですから、その木陰に安楽いすを持ち出してひっくり返っていても全然かまわない。そこにひっくり返って、何となく眺めていたら、ムゴイのうらにわを囲むへいが破れていて、その先のへいも何軒か壊れていて、いったりきたりできるようになっている。そして、4軒先のハッサン先生のうらにわまで見えて、そこで、ムゴイの子どもとそこいらの子どもたちが一緒に遊んでいるのがみえました。あれっとおもって、反対がわをふりかえると、そこは、きちんと塀が閉じられているのです。これは何だ、とおもいました。

でも、そこで、直接、それを聞いてはいけません。下手をすると、フィールドワークで絶対やってはいけない誘導尋問になります。場合によっては、かれらが意識していないことを意識させることになりますので。そこで、それを頭の中に入れて、毎日の観察を続けることになり

ます。

そうすると、まず、となりの家との人間関係が観察の対象になります。

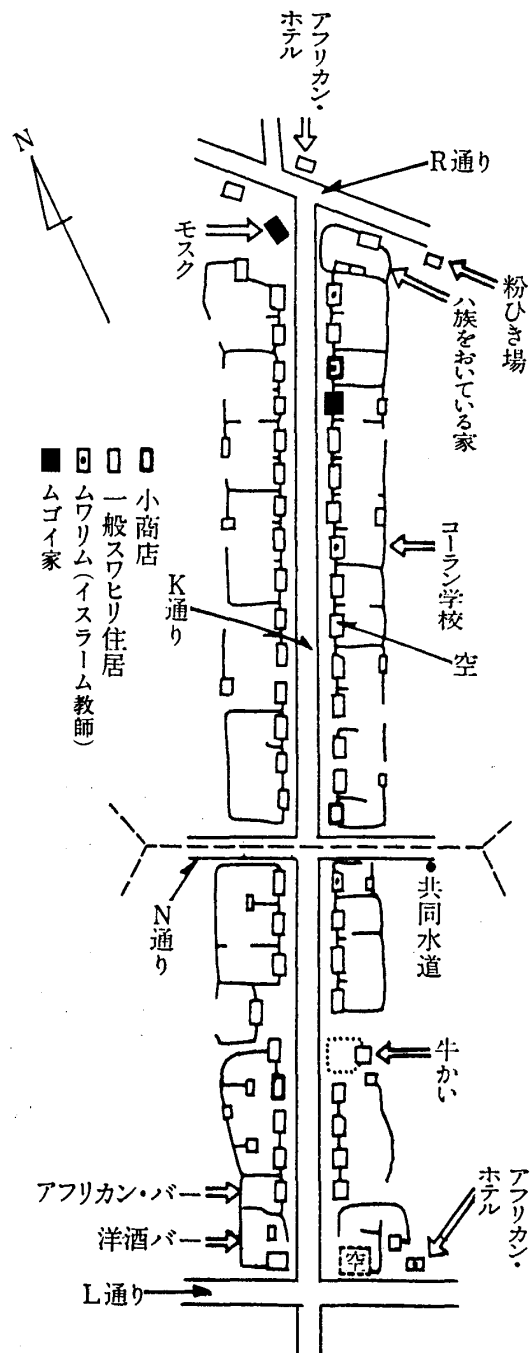
へいが閉じられている右となりのフセニ先生は、イスラーム教師で、ちょっと偏屈な人です。いえのまえにいくらかの商品を並べた店を持ち、自分がまわりのふつうのスワヒリのブワナよりすこし金持ちで、重要人物だとおもっている人でした。

一方、左となりのキブラ老人は、そのころ60歳過ぎ。ムゴイとは親戚でもなく、同じブユですが、ブワリの出身で部族もちがう。かれはもう何回もの結婚、離婚歴があり、かつては、腕のよい漁師だったのですが、寄る年波には勝てず、漁網の繕いも万全にはできないということで、貧しい、その日の生活にも事欠くという状況でした。何人目かのおかみさんは40代。大きい先妻の娘はもう嫁ぎ、10歳をかしらに、3人の幼い子どもがいました。ムゴイの方は、収入もあり、まあ、豊かなほうに属します。

見ていますと、毎日ではないのですが、こちらで昼食の用意をしても、となりのキブラ老人のいえでは、昼食の支度が全然できてないということが起きます。そうすると、ムゴイのかみさんのビンティ・ムリショが声をかけます。「ルキア、ザビブ、ちょっとおいで」。そして、キブラ老人の子どもも一緒に食べるのです。日本だったら、1人増えると、茶碗とか皿とか用意しなければならないから、けっこうたいへんなんだけど、ウジジのばあいは、ウガリという練りかゆを、皿に盛って一緒に食べるのだから、1人や2人食べる人が増えても、1人の食べる量が何分の一か減るだけで、ちゃんと食べられます。家族のなかに何人か加わっても、問題はないわけです。こうして、わたしが記録した、1965年5月17日から7月20日のあいだの65日間に、のべ、187人の家族以外の人に加わっています。この全員がキブラ老人の子どもというわけではないけれど、大半がそうであることは確かです。

しかし、そのときに、「おまえのいえは食べ物がないだろうからおいで」というような言い

方は絶対できません。それは、すべて、状況をさとして、自発的にやることなのです。それによほどの理由がない限り、まちがっても一人前のブワナ（旦那衆）であるキブラ老人やおかみさんを誘ってはいけません。相手の体面を傷つけないように、それが何より大事なのです。むしろ、大げさにいえば、お願いして食べてもらうくらいの気配りがあるわけです。スワヒリ語では「ジトア（jitoa）」といいます。「ジ」は自ら、「トア」は差し出す。つまり、



資料5 ウジジのウア・モジャ・グループの事例

「自発的に差し出す」という意味です。

そういうあいだに、ビンティ・ムリショが豆の皮むきを始めれば、年長のルキアが来て手伝うし、うちの水がめの水が少なくなれば、それを見ていて、ルキアが、うちのザビブを誘って、バケツを持って、連れだって共同水道まで水くみにいくことになります。向こうは向こうでけっこう気を遣っています。

一方、隣のキブラ老人は、貧乏だけれど、老人の知恵と格式はあるわけです。ある朝、わたしがうらにわにいくと、ムゴイが、そこに座ってうなだれていました。「どうしたのだ」と聞きますと、「ゆうべ真夜中に酔っぱらって帰ってきて、文句をいったビンティ・ムリショを殴ってしまった。そうして、朝になってみると、彼女は怒って実家に帰ってしまった」というのです。すると、すべてお見通しのキブラ老人がやってきて、「ムゴイどうした？」というわけです。かくかくしかじか、話を聞いた老人は、「そうか、ビンティ・ムリショを殴ったのか。だいたい、酒を飲んだおまえがわるい。で、反省しているのか」ということになり、「そうか、反省しているのなら、わたしがいつてわびを入れてきてやろう」ということになります。そして、ビンティ・ムリショの実家にいって、「ムゴイが反省しているのだから、ここは、わたしに免じて、何とか戻ってやってくれないか」。ビンティ・ムリショも、別に、ムゴイを嫌いになったわけではありませんし、ビッグマン (Mtu mkubwa) であるキブラじいさんに頭を下げられたら、これで万事解決ということになります。

うらにわを共同するどこかの家で不幸があれば、すぐに集まって、「おまえは埋葬の手配をしろ」、「おまえは親族に知らせに走れ」、「おまえは明日の朝、役所にいって死亡届の手続きをしろ」と、みんな、自分の親族に不幸があったように、役割を決めて協力します。でも、葬式はこの人たちだけではできません。そうすると、今度は、通りを共同する人びと、つまり、公共のバラザを共同する人びとが協力することになります。わかものは墓地にいて埋



葬の準備を、近所のおんなたちは共同食事の準備を、老人たちは葬式儀礼の支度と実行をというように、うらにわの共同を超えた協力が展開されます。いわば、うらにわ共同の日常的協力に対して、バラザを共有するパブリックな近隣集団は、葬式や結婚式、共同の草刈りや道路整備などの、非日常的な場面での協力をおこなうのです。

そのくらいの観察資料があつまったころ、お向かいの仲良しの2人が、些細なことでけんかをしました。近所が総出で止めるようなけんかでした。そうしたら、翌朝、その1人が、ブッシュにいて、刈ったウモトモト（エレファントグラス）の束をしょってきて、へいを直して閉じてしまいました。またまもなく、仲直りとともに、もとの黙阿弥になったんですけれど、この事件は、わたしの仮説を如実に確かめることとなりました。

#### ウア・モジャ・グループ

わたしは、このうらにわを一緒にする、いわば、第1次近隣集団を、「ウア・モジャ・グループ（ウアはうらにわ、モジャは一つ。つまりうらにわを一緒にするグループの意）」と名づけました（資料5）。これは、ウジジのスワヒリの概念にはないわたしの定義です。一方、バラザを一緒にするグループには、「ンジア・モジャ（通りを一緒にするグループ）」という、かれらの意識的な呼び方があり、ジラニ（隣人）といえ、だいたいこれを指します。これは、のちに、「10戸組」という行政的な区分として、フォーマルな形で顕在化しました。そこには、ジュンベ（地区長）がおかれ、まちの、最小の近隣組織、いわば隣組の単位になりました。このウジジでの近隣組織は、のちにタンザニア政府に採用され、全国の隣組制度になったそうです。

このようなウア・モジャ・グループは、いくつかの例外を除いて、親戚でも、おなじ部族でもない結びつきです。ウジジのスワヒリの生活を見ると、みんな、4部屋くらいを持った小さいえと、草べいで囲まれたうらにわだけで

す。子どもが結婚すると、どこかに新居を求めます。よほど地所の余裕がないかぎり、結婚した子どもは、親の近くには住めません。兄弟でも同様です。とすると、部族社会に見られるような、親族組織が近隣集団を構成するという生活は不可能です。その結果、部族や親族をこえ、気の合う仲間とうらにわを共有して、老人、壮年、わかものがない交ぜになって日常的な協力をする、ウア・モジャという、選択的・都市的な日常的協力、まあいえば、日本の長屋みたいな生活が実現するということになります。

さらに、いくつかの通りを束ねて、そこに一つのモスク、つまりイスラームの礼拝所が用意されます。それを共同するのが、ムスキティ・モジャ（モスクを一緒にする）の結合で、これは、日常、非日常の生活協力を超えた宗教的統合です。

このような第1次近隣集団、第2次近隣集団、第3次近隣集団を、ウジジの人たちみんなが持っているわけです。しかも、子どもたちが成長するあいだは、自分の親の近隣集団で育ち、そこの人びと、とくに同年配の子どもたちと一緒に社会関係を結ぶ。そして、成人になって結婚し、子どもを育てるときは、親と一緒に住むということはほとんどありませんので、別のところに住んで、あたらしい近隣関係を結ぶのです。そうすると、一生のあいだに、少なくとも2回、こういう近隣集団を経験することになります。そういう形で、人びとが、ウジジのいろいろな場所をいき来することで、ウジジの全体的なスワヒリの中核的な枠、基礎的な社会関係が維持されていく。これが、ウジジのスワヒリを結びつける、地縁的な結びつきです。

さらに、ウジジのスワヒリは、ほとんど99%、ウジジのスワヒリ同士で結婚します。初婚は、同じ部族同士が多い。これは、親や親族に助けをもらう必要からでしょう。そのあとは部族を超えた、スワヒリ同士の通婚がふつうです。いまは、ときどきは、首都のダレサラームや、ほかのまちのスワヒリとも結婚しますが、基本的には、ウジジのスワヒリの一体性は、こ

のスワヒリ同士の結婚の累積にあるといえるでしょう。これも、大事なことでした。

### ウジジのおしゃべり集団

そして、さらに、ウジジのスワヒリの人びとをくっつけているものがあるのだというのが、わたしのもうひとつの発見です。それが、おしゃべりグループ。いわばおしゃべりの輪が、ウジジ全体で広がっているのです。

先にふれたバラザ、それぞれの人びとの家のまへの空間です。これは、基本的におとこの場所で、そこにはスワヒリのおじさんたちが座っています。わたしののちの調査では、家の前を通る人びとの85%は顔見知りです。あいさつしたり、立ち寄っていく人も半分くらいいます。そこで、立ち寄ってあいさつしたり、「寄ってけ」などと声をかけたりします。

おもしろいのは、お店です。日本なら、お店に「ごめんください」と入ると、なかから店の人が出てきますが、ウジジのお店の人、だいたい、店のまへのバラザに座っていたり、いすをだしたりして、客を待っています。そして、まず、おしゃべりをして、「さて、それでなにか…」ということになります。それから、アフリカン・ホテリ、スワヒリの喫茶店です。これは、だいたい、家のまへ、バラザの部屋を2部屋くらい通して、そこにベンチやテーブルが置いてあって、そこで、小さな茶碗のコーヒーとか、ミルク一杯の紅茶とか、あるいはバナナとか、揚げドーナツとかが提供されます。やしきのまへの空き地や、大樹の木陰にベンチを出したり、倒木を使ってベンチ代わりに、というのもあります。スワヒリのブワナたちは、朝の礼拝が終わると、そういうホテリによって、1杯2円のコーヒーなどをすすりながら、大声でおしゃべりをする。路上や市場もおしゃべりの場所になります。

だから、ムゴイと連れだって市場まで、だいたい1キロちょっとあるのですが、あっちで引っかかっておしゃべり、こっちで引っかかっておしゃべりと、1時間以上かかっていて、1時間くらいかけて帰ってくる。そのあいだ

に、市場でもしゃべり、ときにはアフリカン・ホテリに座り込むということになります。

たとえば、ずっといくと、向こうからおじさんがやってきて、「おい、ラマザーニじいさんが死んだのを知っているかい」。「いや知らなかった。病気で入院していることは聞いていたけれど」。そして、「そうか亡くなったのか。じゃあ、帰りにおくやみによっていかなくちゃ」、などといって別れる。また歩いていくと、会った人に、「ラマザーニじいさんが死んだのを知っているかい」。「ああ、さっき聞いた」、とか、「いや、知らなかった」、ということになります。こうして、市場にいきつくまでに、どんな病気で入院してとか、病状とか、臨終の様子とか、さらに、「あのじいさん、若いころはけっこう発展家で、若い子に手を出して、性病を移されて、たいへんだったんだ」とか、「それで、伝統医を求めてタンガニーカ湖をわたってコンゴまでいったんだ」、「サカナがいっぱいとれたときに、金が入って、嫁さんを3人もらったんだけど、まもなく逃げられたんだ」。そういう、昔の武勇伝が話題になる。そのうちに、「あのじいさん、最後は、いいムスリムになって、礼拝も欠かさず、長いあいだムワッジーニ（モスクの礼拝の時間を知らせる役割）をやっていたよね。アラーフ・アクバル（神は偉大なり）」と、かれの人生の評価まで聞かされることになります。

ウジジのまちをずうっと歩いていくと、こうしてその日に起こったニュースが、しばしば、コメント付きで知らされることになります。きちんとした統計は取っていませんが、当時ウジジでラジオを持っていた人は、30人に1人もいませんでした。新聞は、3日遅れでとなりの県都キゴマまでは来ますが、それを買いにいく人は少ない。雑誌もキゴマでは買えますが、毎月定期的に通ってくるなどというスワヒリはいませんでした。そうすると、かれらの得るニュースがどこから来るかといえば、基本的にはまちのおしゃべりからです。ラジオを持っている人が伝える、「昨日、ニエレレさん（当時の大統領）が、こんな演説をやっていた」とかといっ

た話も、大半の人たちは、まちのおしゃべりのなかで聞くわけです。

### おしゃべりが強めるスワヒリ意識

どういふことがおしゃべりの話題になるのかといえば、まず、まちや国のニュース、うわさ話、人の悪口や批判、などです。「あの役人は、どうも、このところ金遣いが荒い。毎日バーで飲んだくれている。なにかわるいことをやっているにちがいない」。そうすると何ヶ月か後に、逮捕とか手入れというようなニュースがながれる。中央政府から赴任してきた人びとへの監視や批判話で盛り上がっているところに、警官や兵士のすがたが見えると、とたんにいったん声を潜めて、かれのいき過ぎるのを待つなんていうことはしばしばありました。

それから、イスラームをめぐるいろいろな話。たとえばだれかが死ぬと、「相続はどうなるのだろう?」、「シェリア（イスラームの法）では、おとこ1にたいして、おんなは半分ときまっているのだ。で、あそこは兄弟が何人で、どうして、こうして…」と講釈してくれる老人がいる。わかものはそれをホテリでお茶を飲みながらのおしゃべりのなかで知るわけです。

また、昔話や歴史の話。「ドイツ時代、泥棒をした人が山のなかに逃げ込んで、腹を空かせて出てきたところをドイツ兵が銃で撃ち殺した」、「その首を、見せしめに晒して…」とか。「第1次大戦でドイツが負けたときに、アラブ人はウジジに残ったけれど、インド人は一緒にみんな逃げ出した」、あるいは、「昔あいつは、白人のたくさんのお金を持ち逃げして、隣のブルンジで商売をはじめ、ほとぼりが冷めたころ戻って来て、金持ちになったんだ。うまくやったよ」とか。

そして、苦しい生活への愚痴。「息子が都会に出ていったきり連絡がない、仕送りもない」とか、「税金を払えとってきしたが、お金がない」とか、みんなそれぞれの生活の悩みをうちあけて身の不運をなげく。

こういう話が、毎日語られ、皆それぞれに、

相づちを打ったり、反論したり、また、非難したり、からかったり、笑いさざめき、悲憤慷慨し、正論をぶち、宗教の話をしみじみする。いろいろなニュースの評価を通じて、人びとの意見を調整し、時には世論をつくりあげていく。最後は、たいてい「アラーフ・アクバル」で終わります。

ニュースの交換、うわさ話や悪口をつうじての社会的監視、ハディースやシェリアの情報交換をつうじてのイスラーム知識や意識の確認、そして、日々の苦勞への愚痴や慰め合いも、そこで吐き出される。容赦ない批判もあれば、嘆きの吐露や、それへの慰めあいもある。そのようなおしゃべりをつうじて、ウジジの人びとは、「われわれスワヒリ」という市民意識を強めるわけです。こうして、ウジジの市民意識、スワヒリの共通意識が維持され、作り上げられていく。そういう日々が繰り返されている。第1次、第2次、第3次の近隣集団における日常的、非日常的協力、スワヒリ内婚による血縁集団の協力、そして、それを日常的に結びつけるおしゃべりの輪、そのくりかえしです。

わたしが修士論文で書いた理論、つまり、人間の文化は、それを支える人びとの（日常的な）組織的行動がなければ、保持できない、維持できない。そして、それが変わっていくためには、また、彼らの組織的行動がなければ変わらない。それがいえるのではないかとおもいます。そのことは、あとから気づいたわけですが。

これが、ウジジという小さなまちで、わたしが目にし、耳にし、会得したウジジのスワヒリの人びとの生活、つまり、民族誌です。このほか、ウジジのスワヒリが、何を食べているのか、何を着ているのか、どんな家に住んでいるのか、そのような生活を維持するためにどういふ生き方をしているのか、どうやって子どもを育てているのか、老人はどう扱われているのか、かれらの生活のすべては無理としても、できるだけ、その全体像にアプローチする、これがわたしのウジジでの仕事でした。

けっこう気が多かったので、スワヒリの服装

とか、住居とかいろいろな民族誌ができました。さいわいなことに、近隣集団とおしゃべり集団について『民族学研究』（33-2）に書いた、「東アフリカ都市の近隣集団」が、第5回の渋沢賞受賞対象に選ばれました。

### 東アフリカのスワヒリ社会

もうひとつ、わたしは、スワヒリ社会について、ほかの人びとが気づいていない、のちに多くの海外の研究者から注目された発見をしました。それは、スワヒリ社会の中心、つまり東アフリカ海岸部からではなく、ウジジという、一番端っこ、フロンティアから眺めていたことと大きく関わるのですが。

先にもふれたように、スワヒリ文化は、汎インド洋交易の西端、インド洋沿岸部の交易のみなどまちで発展した都市文化です。それが、19世紀の内陸交易の発達で、ウジジまでのびてきて、ウジジに集まってきた多くの異なる部族から出てきた人びとが、海岸部からやってきたスワヒリ商人をモデルにして、「われわれはスワヒリになった」という意識を共有するようになった。これは、沿岸部のスワヒリ社会や文化を研究している研究者には、もてなかった考え方です。

そして、この発見には、じつは、京都大学調査隊の仲間の、マンゴーラにおける調査の成果が大きく関わっています。まえにもふれましたが、エヤシ湖東南岸のマンゴーラには、ハツァという狩猟採集民、ダトーガというウシ牧畜民、イラクというウシを飼う半農半牧民、そして、スワヒリ農耕民、かれらが、一つの広い地域に共生していた地域社会でした。ここで、スワヒリ農耕民の調査をしたのが、和崎洋一さんと石毛直道さんでした。2人は、植民地時代の開拓計画の募集に応募して集まってきたマンゴーラの農耕民、つまり、ひとつの部族ではなく、いろいろな部族から、いろいろなところから、いろいろなライフヒストリーを背負って、集まってきた、多部族の人びとが生活する社会を研究したのです。

おもしろいのは、こうして計画的に作られた

開拓社会に入ってきた人びとが、まわりの狩猟採集民や牧畜民に対して、「われわれ農耕民」という優越意識の中核に、「われわれスワヒリ」という意識をもちこんできたことでした。かれらのおおくはイスラーム教徒です。しかし、若干のキリスト教徒もいます。かれらは、それぞれ自分の出自部族を持ち、その帰属意識も持ち続けているのだけれど、同時に、一つの地域社会のなかで、農耕民として、まわりの狩猟採集民、牧畜民などと社会関係を結ぶようになったとき、それぞれの出自部族を超えた、「われわれスワヒリ」という意識で固まり、まわりと対峙するようになったのです。

どこかの部族社会で自分の父祖伝来の農耕を続けてきた人びとは、こういう開拓社会計画に応募することほとんどありえない。いつか、なんとかして、自分の耕地を持ちたいとおもいながら、出自のむら、部族社会を離れ、現金収入を求めて、都市やプランテーションや、鉱山を歩いていた人びと、スワヒリの言葉で言えば、各地をテンベア（tembea、歩き回るの意）していた人びとが、この募集に応募してきたわけです。そして、狩猟採集民ハツァ族、牧畜民ダトーガ族、農牧民イラク族といった部族集団に対して、農耕をやっている集団としての自分たちの共通意識、帰属意識の中心に「われわれスワヒリ」、つまり、東アフリカ内陸部で出現してきた最初の、かつ唯一の超部族的集団意識をもとめたということになります。

和崎さんの言によれば、なぜかれらがスワヒリということになるかといえば、狩猟採集民、牧畜民、農牧民といったまわりの人びと、部族民にたいして、農耕民として対峙していくためには、東アフリカでは、「スワヒリである」ということ以外にはないということです。部族本位制社会では、こういうグループが、個々の部族社会と対峙するには、なにか統一意識、共同意識をもたなければならない。

和崎さんは、もう一つよい例をあげています。かれがマンゴーラで知り合った、スクマ族出身のスワヒリが、自分の故郷であるスクマランドに帰ったので、和崎さんが訪ねていった。

そこでの和崎さんの問いに対して、かれは「わたしはマンガーラにいればスワヒリだが、ここではスクマだ」といいました。「じゃあ、スワヒリはどこにいるのだ」という和崎さんの問いに、かれは「ここのスワヒリはマデユカーニにいる」と答えました。「マデユカ」というのは、商店（デユカ）の複数、「ニ」は、「（それがある）場所」という意味です。つまり、スワヒリは、商店がいくつかある場所、つまり、市街地やまちにしかないということになります。スクマ族の農耕民しかない場所には、スワヒリはいない。マンガーラや市街地など、多くの異なる部族の人びとが集まったところで初めて、スワヒリなのです。

石毛さんは、「スワヒリ化について」という論文のなかで、マンガーラの農耕民たちのあいだで、スワヒリ民とはなにか、どう意識されているのかを、かれらの日々の言動のなかで探ろうとしました。その論文で石毛さんは、マンガーラのスワヒリ意識には、広義のキリスト教徒も含めた農耕民としてのスワヒリ意識と、狭義のイスラーム教徒だけのスワヒリ意識と、二つのレベルがあると述べています。政府から派遣されてマンガーラにやってきたエリートのある人びとの呼びかけは、「ハツァの皆さん（狩猟採集民）、ダトーガの皆さん（牧畜民）、イラクの皆さん（農牧民）、そして、スワヒリの皆さん」となります。「われわれスワヒリ」は、東アフリカにおける、最初の、たぶん唯一の、超部族的集団の共通意識、統一意識になるわけです。

一方、スワヒリ文化が最初に成立・発達した東アフリカ海岸部、たとえば、タンザニアの首都ダレサラームや、ザンジバル、あるいは、ケニアのモンバサやラム島にいくと、自ら「われわれスワヒリ」なんていう人はいない。海岸の人びとに「おまえはスワヒリか？」などと聞いたら、「とんでもない、わたしはアラブだ」とか、「わたしはシラージだ」と答える。「それじゃあ、スワヒリってだれだ？」と聞くと、「あいつがスワヒリだ」と指さす。見ると、何代かまえに、海岸部に、たぶんどレイや労働移

民として移り住み、ムスリムに改宗して、いまはスワヒリ語を母語にして、仕事としては、ポーターや、いろいろの肉体労働をしている人びとです。「じゃあ、ここでは、スワヒリって何だ」と聞くと、「スワヒリは、ハサ、言葉だ」という。「ハサ」は、「とりわけ」とか、「とくに」といった強調語です。つまり、「スワヒリ語をしゃべる人がスワヒリだとすれば、われわれもスワヒリかもしれないけれども、われわれはあいつら肉体労働をやっているスワヒリとはちがう。その文脈では、われわれはスワヒリじゃないよ」というわけです。

これには、歴史的なバイアスもかかわっています。東アフリカ海岸部のスワヒリのことわざに、「内陸の賢者は、海岸の愚者に劣る」というのがある。内陸でどんなに賢者といわれていても、それは、しょせん、海岸部の愚者にもかなわない。そういうことで、海岸部では、大陸内陸部の人びとを、おくれた、未開の人びとと軽蔑して見る偏見がありました。ところが、ウジジヤマンガーラのようなところで「われわれスワヒリ」という優越意識をよりどころにする人びとがあらわれ、植民地の発達とともに、海岸部の都市までやってきて、大きな顔をして「われわれスワヒリ」をふりまわす。しかも、植民地体制下の人口流動で、だんだん、そういう人びとのほうがマジョリティになっていく。すると、海岸部でスワヒリ文化を身につけた人びとは、「われわれはあんなやつとはちがう」、「あいつらと一緒にされてはかなわない」とかながえて、「われわれはアラブだ」とか、「われわれの先祖はペルシャからきたシラージだ」というように、何百年かまえに起こったであろう混血民意識にかたよっていく。こうして、1920年ころ、植民地化が浸透していくにつれて、海岸部では、「かれはスワヒリである」という言葉に、軽蔑や侮蔑の意味あいが付加されてくることになりました。

海岸部だけでスワヒリを研究している人には、軽蔑までは現象としてわかるけれど、以上のような内陸と関わる歴史的経緯は、なかなか理解できないわけです。

海岸部のスワヒリ、スワヒリ意識をもたないスワヒリ都市民を、わたしは「原スワヒリ民 (Genuine Swahili)」と定義しました。この「原スワヒリ民」とは、「混血民である」、「都市民である」、「イスラーム教徒である」、「スワヒリ的な生活様式をもっている」、「スワヒリ語を母語にしている」、この5つの要素をすべて持っている人びとで、かれら自身の意識は無視しています。

では、ウジジのスワヒリ民はどうなるのかといえ、かれらは、内陸部の部族社会から輩出した人びとです。つまり、海岸部で形成された混血民ではありません。でも、都市民で、ムスリムで、スワヒリ的な生活様式を身につけ、スワヒリ語を母語にしています。マンガーラの狭義のスワヒリ民は、都市的ではありません。広義のスワヒリは、ムスリムに限定されません。さらに、イスラーム教徒の全くいないマサイランドにいけば、スワヒリ語を立派にしゃべるだけで、ネクタイを締めたタンザニアのエリートでも、上手にスワヒリ語で演説すれば、「あいつは、スワヒリだ」ということになります。

わたしは、こうして、スワヒリ文化が、歴史的に、地域的に、東アフリカ内陸部に拡大・浸透していくあいだに、もともとスワヒリに付与されていたスワヒリ的な文化要素が一つ一つ脱落していった、つまり、スワヒリという文化が持っていた構造的意味が変わっていったのだということを書きました。1969年に『アジア経済』(10-2)に書いた「東アフリカのスワヒリについて」という論文です。これは、のちに、さらにフィールドワークのデータを加えて、「東アフリカにおけるスワヒリ認識の地域的構造」(富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開』同朋舎、1980)になります。これは、ケニアのナイロビ大学や、タンザニアのダレサラーム大学でも報告し、のちに、英語でもリایتされて、海外のいろいろな研究者からも評価されました。

それまでのスワヒリ研究では、海岸部のスワヒリ社会や文化を調べるのは当たり前で、そういう研究書はゴマンとあります。しかし、そこ

では、スワヒリの人びとを、“Swahili Speaking People”、つまり、「スワヒリ語を母語にする人びと」と定義するのがふつうで、あとは、スワヒリの特徴は、その多義性にあるといった言い方しかできなかったのです。たしかに、海岸部だけで見ていたらそうなります。それを、内陸部にひろがっていったスワヒリ文化との対比で、構造的にとらえたのは、まちがいなくわたしはじめてです。そこには、マンガーラにおける和崎さん、石毛さん、それに、富川さん、富田さん、その他の京大隊の成果が大きくからんでいたとおもいます。そのへんのデータは、それまで、スワヒリを研究していた研究者のどれも見なかったのだということになります。

#### わたしのフィールドワーク

わたしがウジジにいたあいだに、類人猿班では、西田利貞くんが、マハレでチンパンジーの餌付けに成功して、国際的な仕事がスタートしました。同時期に現地にはいた3人のメンバーは、まちに來れば、ウジジのわたしのいえにやってきて、わたしの手料理で、みんなで夢を語りました。西田くんはチンパンジー、加納隆至くんはコンゴのボノボ(ピグミーチンパンジー)、伊沢紘生くんは南米の類人猿と、それぞれ、あたらしいフィールドを開拓して、いい仕事をなしとげました。わたしがかれらから学んだのは、相手のじゃまをすることなしに、じっと、観察することです。人間社会の場合、なかなかそれはむづかしいのですが、すこしずつ集まる観察資料を、じっと、がまんして累積させていく、そんな忍耐づよさを学びました。わたしの、よいおもい出です。

ウジジでのわたしのフィールドワークは、毎日、聞き耳をたてて、じっと目をこらして、ただ歩いていただけでした。のちに、わたしがザンジバルでフィールドワークをやっていたとき(1989年ごろ)、ナイロビを長く研究している松田素二くんが、ザンジバルにやってきます。「やあ、よく来た」というので、わたしがザンジバル市内を案内しました。人であってあいさつし、また人であってあいさつします。松田く

んは、「日野さんは、わたしが来たので、今日は調査をしないでわたしを案内してくれたんだ」とおもったそうです。次の日もまた、わたしは人びととあいさつを交わして過ごしました。松田くんは、あきれて、わたしがいつ調査しているんだろうとおもったそうです。

わたしの基本的な調査態度は、「人は問いつめたら、ウソをいう」ということです。とくに、調査の場面で、こっちが知りたいことは、親しくなればなるほど、インフォーマントにもわかります。そうすると、向こうは、わたしの誘導的な質問に素早く反応してくれます。こちらが仮説として聞いたことに、しばしば、相手は好意的にイエスと答えてくれます。そうすれば、若い調査者は、もう「鬼首」です。「やった」と、フィールドノートに書き込むでしょう。あぶない、あぶない。

だから、わたしは、自分からインフォーマントを問いつめることは絶対しません。自分からなにかを聞くよりは、能率は悪いけれど、向こうの人びとが勝手におしゃべりしているのを、またそういう会話を、ホテリやバラザで聞き耳をたてて、だまって、目立たないように聞いている。その中で聞いたことを、あとで、いくつか聞いたすかかもしれない。「さっきあなたが話題にしていた人は、だれだっけ」とか、「あのときいついたムリショさんが病気になったというのは、コンゴのなんというところだっけ」などと聞くことはやります。ライフヒストリーや、家族構成など、聞かなければわからないことは、虚心に聞きますが、基本的には、問いつめない。自然な場面でしゃべってもらうような気を遣う。こんなことが、わたしのフィールドでの態度です。

この、聞き耳を立てるという調査には、考え、予想していたことが、だれかの何気ない一言や行動で、「ああ、そういうことだったんだ」とわかる楽しみがあります。たとえば、けんかした次の日に、草を刈ってきて、へいを閉じるなんてことが起こるんです。事件が起これば、ウジジ中のおしゃべりの話題になり、そのいきさつ、人びとの解釈、評価まで、いろいろ

聞き取れます。

でも、いつもだまって、人のことを盗み聞きしているだけではなく、時にはこちらからも話題を提供して、日本のニュースやら、世界で起こったこと、わたしの家族のこと、こちらも、いろいろな話題を出して、スワヒリの人びととしやべり、時にはからかわれ、こっちも負けずにやり返すといった、日常的なやりとりがあったのはもちろんです。またいったら、「よく来た」と懐かしがってくれるような関係を作り、利害を超えた、いい関係が作れたとおもいます。

あのころは、まだ、日本との連絡がうまくいかないこともあり、送金が数ヶ月銀行でストップするというようなこともありました。そのあいだも、ムゴイー家は、いやな顔一つ見せず、居候させてくれました。わたしがマラリアになったら、本当に心配して、近所の人びとも、熱があつて、人と会いたくないわたしを、ドアを蹴破ってお見舞いに来てくれました。

### ウジジでの交友

ウジジの市場のそばに、ムソングラさんという床屋さんがいました。この床屋さんは、いつも、自分のバラザを仕事場にして、そこで働いています。といっても、ほとんど客はいなくて、そこには、いつも何人かの人びとが座りこんでおしゃべりをしていました。わたしがいくと、「ヒノ、カハワ（コーヒー）が入っているぞ」とコーヒーを出してくれました。ウジジで一番立派なバラザでした。

富川さんがウジジに来られたときは、かれの持ち家に泊めてもらったのだけれど、富川さんに食事を出すときも、わたしがいかないと、食べさせてくれないのです。むすこのヒノがいなくて、食事は出せないといって、まちじゅう探して、お使いがわたしを呼びに来るのです。その間、富川さんはお預けです。部屋代は払いましたが、食事については、あとでわたしが見繕ってお礼をするまで、請求はいっさいなし。たぶんお礼をしなくても何もいわなかったとおもいます。



ウジジの長老イディ・ムテコと語る

このムソンゲラじいさんについては、もう一つ思い出があります。ムスリムにとっての大きな義務の一つは、ラマザン月の断食です。日の出から日没まで、食事はおろか、水を飲むことも、タバコを吸うこともできません。わたしも、この断食につきあったのですが、わかものたちが、わたしに「おまえはコベだろう」というのです。「コベ」というのは亀のこと、つまり、断食中に、昼間、首を引っ込めて食べるというので、こっそり断食をやぶる人を指します。わかものたちがこういっているのを聞いたムソンゲラが、わかものをしかりつけて、「おまえらは、なにをいう。ヒノがコベかどうかは、神様がちゃんと見ておられる。おまえらが、とやかくいうことじゃない」といって、そのあとで、「でも、ヒノは、みんなが裸で走り回っているところにいけば、裸で走り回らなくちゃいけないんだな」と、にやりとわらって見せたものでした。なにかで機嫌がわるいときや、わたしに文句をいいたいときは、「ヒノ」が、とつぜん、「ブワナ・ヒノ（ヒノ旦那）」に変わるのも、うれしかったです。

ムソンゲラは、わたしがウジジを去った2年後に亡くなり、郊外のカシンボのじぶんの畑のなかで眠っています。コンゴのマニエマの出身ですが、かれの先祖こそ、ドレイ交易のエージェントだったのではないかとおもっています。

わたしは、こうして、多くの友人に出会ったウジジを、わたしの一つの故郷とおもっています。

## その後のウジジ

ここで、わたしの東アフリカ、ウジジでの調査は、一段落します。2年間ウジジでくらし、1966年10月、わたしは、類人猿班の伊谷純一郎さん、西田利貞くん、伊沢紘生くん、加納隆至くんたちに、キゴマ駅頭で送られて、帰国の途につきました。

最初に日本に帰るときは、またすぐ来よう、来れるとおもってましたが、そのあと、就職して、西アフリカにフィールドを持ったこともあり、再びウジジに戻ったのは、7年後の1973年でした。このときは、もう結婚していて、妻のヨーコもいっしょでした。予告なしに、汽車に乗っていき、1週間しかいなかったの、ウジジのホテルに泊まりました。ムソンゲラはもう故人でしたが、ムゴイがピンティ・ムリショと離婚していて、わたしは何とかよりを戻してほしいとおもって画策したのですが、結局はだめだったようです。

その次にいったのは、1988年。そのときは、ムゴイがすでに亡くなっていたことを聞いていました。それでも、できれば、かつて2年間住んだムゴイのやしきに住みたいとおもっていたのですが、ムゴイ家は一家離散していて、やしきは他の人が借りていました。それで、1967年当時、ムゴイのところに出入りしていた、当時16歳のトングウェ族のムウィガ、かれは、さいしょにわたしの調査助手をしてくれたんですが、その縁で、かれのやしきに下宿しました。そこは家族が多いうえに、居候がいつもいっぱいいるし、いつも近所の子どもたちがつきまとうし、それはそれでおもしろかったのですが、けっこう疲れました。

そして、1990年にいったときには、故ムソンゲラの旧宅に住みました。ウジジで一番立派なバラザをもったいえです。借りたのは、ムソンゲラが居室にしていた部屋です。竹で編んだ立派な天井がつき、築150年ちかい家です。ムソンゲラの兄のハミシという人の子どもであるリサシが、いまの主人です。かれも、ムウィガと同年代、わたしがムソンゲラじいさんのところでコーヒーをごちそうになっているころは、16〜



7歳の少年でした。

いまはもう、予告なしにいても、わたしの部屋は、そのままベッドも置いてあるし、わたしたちが使っていたテーブル、そこにかかっているテーブルセンターも、色あせてはいますがそのまま、わたしたちがテーブルの上に置いていった万古焼きの急須までそのまま置いてあって、その日から住めるようになっていきます。前回、数年ぶりに、しかも予告なしにいったので、ホテルをとって、荷物を置いていったところ、「何いってるんだ。ホテルなんかいくな」ということで、すぐにホテルをキャンセルということになりました。わたしが面倒くさがる水浴びも、1日に何回もお湯が用意されていて、無理矢理させられます。もう50歳を過ぎたというのに、リサシは料理の名人で、わたしが、今日はダガーが食いたい、今日はゲブカ（サカナの名）だとわがままをいえば、ちゃんとその料理が出てくる。そんな生活が、ウジジには待っています。

#### ウジジの追跡調査

ウジジの本格的な再調査、追跡調査をはじめたのは、1980年代の終わりからでした。ムウィガ、リサシとのウジジ生活の成果は、「ウジジの27年：東アフリカ内陸スワヒリ都市の社会変化」（『アジア・アフリカ言語文化研究』48・49合併号、1995）にまとめられています。この論文では、最初に見て調査したウジジと、27年後にいった見たウジジ、その変化を、なるべく、見逃さないように眺めています。

ウジジでのフィールドワークで、わたしにとってラッキーだったのは、最初に入ったのが1964年10月、タンザニアが独立を達成して2年目だったことです。タンガニーカがザンジバルと合邦したのが1964年4月で、タンザニアというあたらしい国家が国民形成をしていった時間を、わたしも共有することができました。国造りに情熱を持った若いエリートたちともつきあわせてもらいました。

残念なのは、タンザニアが大きく揺れ、試行錯誤の実験を試みた、1967年のアルーシャ宣

言、そのあとのいわゆるウジャマー（タンザニアの社会主義体制作り、いわば、中国の文化大革命のような時期）の数年間の時期に訪ねられなかったことです。再訪したときは、ウジャマーは、もう思い出話のなかにありました。政府の強制的な政策によって被った大きな変化、たとえば、郊外の耕地を収用された、インド人やアラブ人の商店の国有化、物資の統制によってあらゆる商品が姿を消した、そのときに役人の汚職や使い込みが多発した、などなど、堰を切ったようにいろいろな話が出てきました。話が佳境に入ったとき、一斉に皆が口をつぐんだので、何が起こったのかと見ると、お巡りさんがそばを通りかかった、などということもありました。

でも、結局は、ウジジは大きく変わりはありませんでした。いま、かつてのスワヒリ文化先進圏は、国家の開発計画では、後進地域に分類されていますし、県都キゴマの人びとは、口々に、「ウジジのスワヒリはみんな怠け者だ」といいます。ウジジの人びとは、毎日、多くの時間をおしゃべりに費やし、コーランを読み、礼拝を欠かさず、神にすべてをゆだねて、平和に生きていこうという姿勢がありありとうかがわれます。貧しく生活は苦しいのですが、それを選び取って、平安に生きるという選択肢もあってよいのだと、わたしはおもっています。

よりよい生業や、収入を求めたスワヒリのわかものは、首都のダレサラームや、都会に出ていって、苦勞しています。それも選択肢です。ただ、そうやって出ていったわかものから期待した仕送りがない、多くの老人たちが、ウジジの相互扶助のなかではそばそと暮らしています。

かつては腕のよい家具職人で、昔わたしの安楽いすをつくってくれたのですが、老後はコフィア（イスラームの帽子）の図案の刺繍をやって、ほそばそと暮らしているサイディじいさんは、周囲の民生委員が定期的に気を遣ってくれて生きていました。むすこたちはダレサラームで暮らしていて、仕送りはありません。そのサイディじいさんが、定規とちびた鉛筆で

何日もかけて書き上げた図案を、わかものが、キゴマのコピー機でコピーして、それで刺繍をするというので、サイディじいさんの注文は減りました。でも、ときにはいろいろな不正義に悲憤慷慨しながら、人をうらまず、人に愛され、神のご加護をただ祈り続けて、数年前、平和な死を迎えました。

世話になったムゴイ夫妻、となりのキブラじいさんをはじめ、多くのウジジの仲間は、神に召されて、寂しくなっています。これも、長期間のフィールドワークのもつ宿命でしょう。わたしが初めてウジジにすみついたころ、そこいらを走り回り、わたしにまわりついてた子どもたちが、もう立派な中年です。ダレサラムで、真っ黒なひげいっぱいのおじさんに「ひょっとして、ブワナ・ヒノではないか？」と声をかけられ、30年ぶりの再会を楽しんだなどということもありました。

#### 帰国、就職、そして結婚

ともかく、こうして2年たって、1966年の10月に帰国しました。羽田に着いたら、富川さんに「おまえは、故郷の北海道に帰っちゃったら、環境にかまけて、呆けちゃうから、いまのうちに論文を書いてしまえ」といわれ、そのまま富川さんの家に居候し、缶詰になりました。毎日、「今日はどこまでできた」と問いつめられました。もちろん、ワープロじゃなくて、手書き原稿です。このとき、40日ほどで大小7つの論文を書きました。

富川さんは、わたしがアフリカに出かけるまえ、北大から、新設の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に移られていました。北大では、10数年助手で過ごされたことになりました。

北大の杉野目晴貞学長は、「富川がいれば、もっと早くに文化人類学科ができたのに、しかもそのために富川自身ががんばってきたのに、とつぜん、戦線離脱して（アフリカにいつてしまつて）けしからん」といわれていたそうです。それに対して、杉野目学長と冗談がいい合える仲の富田浩造が、「それは、杉野目先生が

早く動いてくれなかったからだ。だいたい、北大は富川さんを、助手身分で10年以上放っておいたではないですか。もっと早く動いてくださったら、われわれがアフリカに行くこともなかったんだ」といつてからんだらしいけれど。

ともかく、いっぱい論文を書いたおかげで、翌年（1967年）の8月、わたしも、アジア・アフリカ言語文化研究所に入ることができました。34歳で初めて就職したことになります。そして、この就職を期に、結婚します。ヨーコです。わたしの学生時代からの友人、アフリカ仲間の富田浩造の紹介でした。「日野は、自分で嫁さんを見つける才覚もないから、誰かいい人をさがしてやれ」、そういう気配りだったとおもいます。

ヨーコとは、いまも一緒です。この人のえらいところは、まず、必ずわたしと一緒にアフリカへいくことです。スワヒリ語も、フランス語も、たぶんブーム語も、わたしより上手にしゃべります。わたしのフィールドは、だいたいイスラーム社会です。イスラーム社会は、男女分業、男女隔離の社会ですから、おとこのわたしは女性社会に近づけません。ヨーコは、社会のおんなの人びとと一緒に暮らし、おしゃべりをし、多くの重要な情報をもたらしてくれました。近年になって疲れるまで、ヨーコは、カメルーンも、タンザニアも、スーダンも一緒にいつてくれました。マラリアやいろいろな病気も経験して、苦労もさせたけれど、他の人にはできないたのしい経験もできただろうとおもいます。いわば、わたしの研究業績は、2人の合作のようなものです。

#### 創成期のアジア・アフリカ言語文化研究所

アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA研）では、数年間は専任講師でした。AA研は、1964年の開所以来、岡正雄さんが所長で、歴史、言語、文化の3つの専門領域をもつ、大学共同利用研究所でした。日本中の研究者が、アジア、アフリカの研究をやるための組織と施設を用意し、共同研究の中心になるというのが目的でした。アフリカ関連は、富川さん、山口

昌男さん、わたし、助手のスワヒリ語の守野庸雄さん、ハウサ語の松下周二さん、あとで、川田順造さん、湯川恭敏さん、加賀谷良平さん、梶茂樹さんなどなど、多士済々でした。

AA研のすばらしいところは、研究地域を超え、専門分野のちがった人びとと一緒に共同研究をする自由な雰囲気でした。フィールドワークを旗印にしていますから、書齋にこもって文献研究をしていた歴史学者も、音声を聞きただしていた言語学者も、みんな、フィールドワークをやるというのが、この研究所の特徴でした。図書費はすくなくて、本のない研究所という悪評はあったらしいけれど、共同研究をやる予算はけっこう潤沢でした。つまり、共同研究を組織すれば、年に何回か、全国の研究者が参加する共同研究会を開催できる旅費がつくということでした。こういう旅費は、文部省では、それまでは考えられていなかったようです。

AA研で、1967年に富川さんとわれわれがはじめたプロジェクトが、「アフリカ部族社会の比較研究」です。富川さん、和崎洋一さん、米山俊直さん、長島信弘さん、阿部年晴さんなどが、最初のメンバーでした。この共同研究の第一の目的は、それまで個々にフィールドワークをはじめていたアフリカ研究者の資料を、いっぺん、それぞれ提示して、共同の財産にしようということでした。2つの報告集が出ています。ひとつは『アフリカ部族社会の特質をめぐって』（1971）、もうひとつが『アフリカ社会の地域性』（1973）です。

### イスラーム研究のあたらしいごき

AA研で、もうひとつわたしが加わったのが、「アジア・アフリカにおけるイスラーム化と近代化の比較研究」というイスラーム研究のプロジェクトです。板垣雄三さん、三木亘さん、永田雄三さん、原忠彦さんなどとともに、前島信次さん、島田襄平さんなど、日本のイスラーム研究のパイオニアたちが加わっていました。

たぶん、わたしのAA研でのデビューの報告だったとおもうのですが、そこでウジジの話を

しました。ウジジのスワヒリがいかに立派なムスリムかというようなことを話しました。すると、島田襄平さんが、「ウジジの人びとはワクフをやりますか？」と質問されました。「えっ、ワクフって何ですか？」。わたしはワクフを知らなかったのです。「ワクフというのは、ムスリムが、自分が死ぬときなどに、自分の財産などをイスラームのために遺すというものです」。そんなことウジジのスワヒリはやりませんので、「ありません」。「ああ、そうですか、ワクフはないのですか。では、かれらはどうやって布教しますか？」。「とんでもない、ウジジのスワヒリの人びとは、まわりの人びとが、自分より一つ格下の野蛮な人びとだとおもっていますから、かれらを自分のたちのレベルに引き上げてやろうなんて考えもしません」。こう答えたら、「ええっ、それでもイスラームですか。そんなイスラームがあるのかね？」。そこでわたしが、逆らっていったのは、「いやー、ウジジは田舎イスラームなんです」。そこから「田舎イスラーム」というタームが日本のイスラーム学界に登場しました。

これは、わたしがいいだしてタームが定着したというよりは、ここで初めて、文献研究でない、イスラーム社会についてのフィールドワークによる生きた資料が日本でも提供されはじめたということです。アフリカの和崎さんやわたし、マレーシアの坪内良博さん、パキスタン、インドネシアの原忠彦さんなどのイスラーム社会研究のフィールドのデータが出てきた。これは、おしなべて、イスラーム社会の辺境部、つまり、「田舎イスラーム」のデータです。少し後には、サウディの片倉もとこさん、エジプト、スーダンの大塚和夫さんなど、イスラーム社会の中核部でのデータも提供されますが、このころから、そこがイスラーム社会だからといったのではなく、そのフィールドへいって見たらたまたまイスラーム社会だったという生のデータがあつまってきて、文献研究にはない、あたらしい要素が、日本の研究界に加わったのだらうとおもいます。この時代に、あたらしいイスラーム研究がはじまったのです。

そのあと、歴史学者の中でも、板垣雄三さん、三木亘さん、家島彦一さん、その他のフィールドワーカーが輩出して、AA研の共同研究を豊かにしていきました。ともかく、創成期のAA研は勢いがありました。

(つづく)